

AMPHIBIOUS MOBILE SUIT

双葉社 MOOK

**GREAT
MECHANIC**
グレートメカニック
スイート

モビルスーツ
全集②
水陸両用
モビルスーツ
BOOK

水陸両用 モビルスーツBOOK

MSM-07

07







008 Introduction
010 水陸両用MS&MAカラーイラストラインアップ
014 水陸両用機小史
014 水陸両用機の戦場
ジャブロー／ベルヴァスト／大西洋／北極／その他

026 ゴッグ系 各種機体解説

ゴッグ／ハイゴッグ

032 ズゴック系 各種機体解説

ズゴック／ズゴックE／ゼーゴック／ゾゴック

042 アッガイ・ザク系 その他 各種機体解説

アッガイ／アッガイ／ジュアップ
ザク・マリンタイプ／ザク・マリナー
アップ／ゾック／グラブロ／カブル

062 連邦軍の水陸両用機 各種機体解説

水中型ガンダム／アクア・ジム

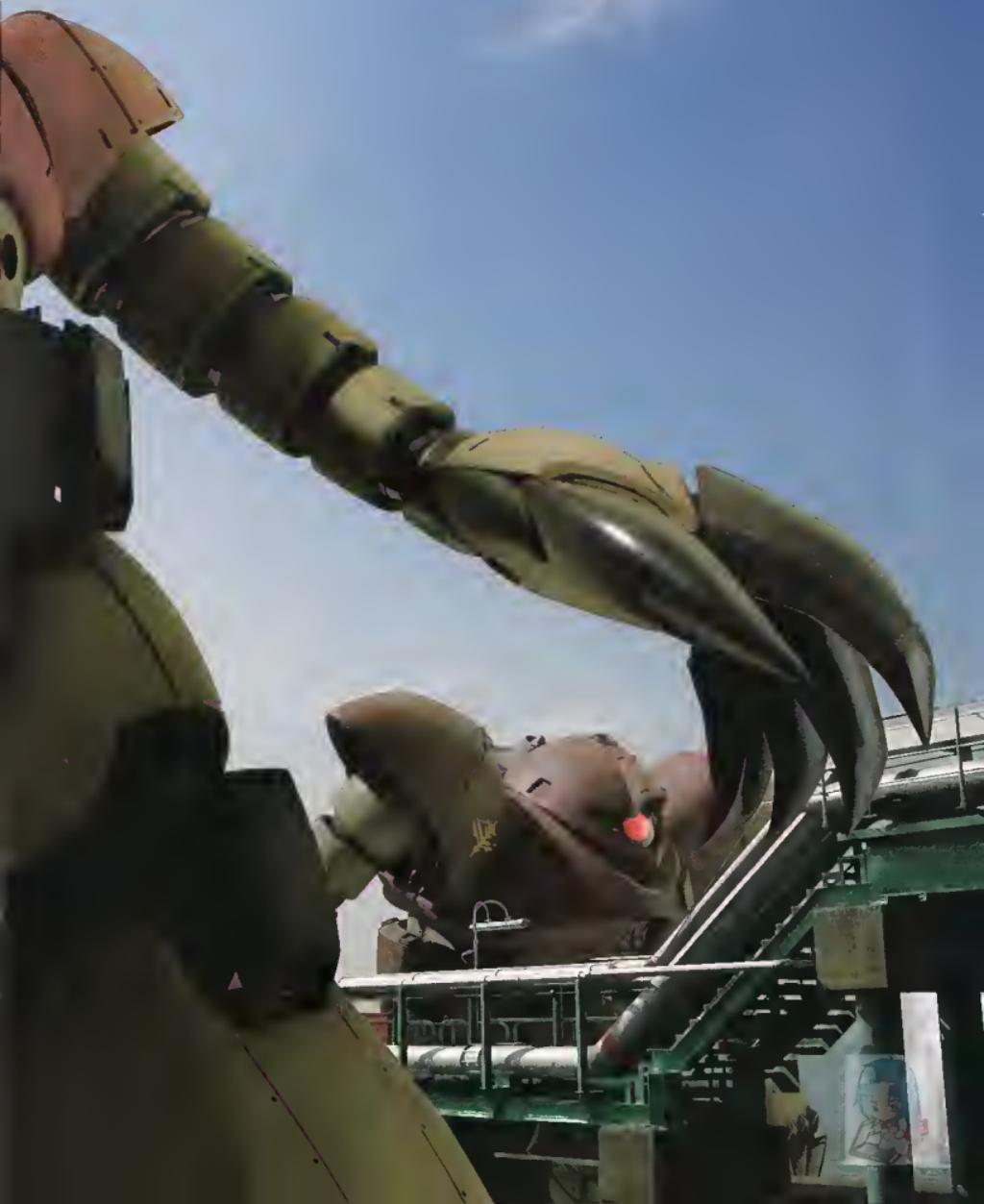
068 Vガンダムの水陸両用機
072 水陸両用モビルスーツの迷彩
076 ヤマザキ軍曹のプラモバカ一代 出張版
080 オールガンダム水モビ大集結!
086 宇宙世紀の水上戦力・航空戦力
090 水陸両用モビルスーツのメカニズム
094 水陸両用モビルスーツ戦術概論
100 水陸両用機の武装概論
104 水陸両用MS設定資料集
126 水陸両用機スペック一覧



MSM

MSM-03

Gogg









X

力好きの男子が、その言葉を聞くだけではワクワクするメカニズムの中に、複合機能を備えるハイブリート的な要素を持つものがあると思う。

例えば航空戦艦、例えば垂直離着陸。

最近ならば、それこそ文字通りハイブリッド・カー、やフリーゲージトレインなども、そういった類に属するのかも知れない。

大体において、そういったハイブリットなものは、実際はどちらかメインとなる機能に、もう一つの機能を付加したものが多く、それも副次的で「でさくなくはない」という程度の、機械としては中途半端なものである事が多い。

ハイブリッド・カーも、元をたどれば電気自動車のバッテリーのテクノロジーが未熟だから登場した、過渡期的な存在でしかない。

しかし、そういったマルチホールなものは、そのメカニズムの複雑さもあり、メカ好き男子を大いに刺激するものだ。そして、水陸両用機も、そういった魅力を持つものの一つと言つていいだろ。

水陸両用モビルスーツが「機動戦士ガンダム」の映像上に登場したのは、1979年9月29日、第26話「復活のシヤア」においてだった。

最初に現れたモビルスーツは、コング。手にはクロードを持ち、アースカラーグリーンぐりした体でビーム兵器を撃つ

様は、ま
さに怪獣
とでも
いうべき姿で
あつた。

この
頃、作品
としての
機動戦士ガ
ンダム」のメ
カ描写は、微妙
な舵の変更を迫られ
てたという。それは、

当初は「ザク」の
みで作品
を描く、というような方針だった
のが、スポンサーからの要望などによ
り、「新型の敵メカをなるべく出す」と
いう方向へ傾くことになつたのだ。結
果から見れば、この方向転換は後のガ
ンダムにとって大きな恵みをもたらす
ことになつた。

異形の姿を持つ



水陸両用機もそいつた渦中にあつたため、わざわざ話しか登場しないにも関わらず、5種類もの新型機が登場する」ととなつた。それはおしなべて手にクローキを持ち、そのシルエットも今までのモビルスーツと一線を画すものだ。そしてもうひとつ衝撃だったのはその強さであろう。

『機動戦士ガンダム』の作品において、初出の新型機は常に強い。もちろん、水陸両用の強さもそいつた演出上の都合に則つたものでしかなかったわけだが、ビーム兵器の使用や、ハイパワーモードの描写は、それまでの地上用のモビルスーツとは別のものだった。それは相当なインパクトをもつて迎えられたようで、後の世にその性能を数値化する「設定」がなされる時に、ザクやグフなどよりも高性能機とされ、そのために「水陸式シェネレーター」などという名前まで作られた。

ハイブリッドなメカのイメージ、怪獣を思わせる異形なシルエット、そして設定された高性能。水陸両用モビルスーツは、ガンダム世界において特異な地位を獲得したと言つていいだろう。しかしその後、宇宙世紀を扱つた物語において、水陸両用モビルスーツはほとんど登場する事がなくなった。それは、

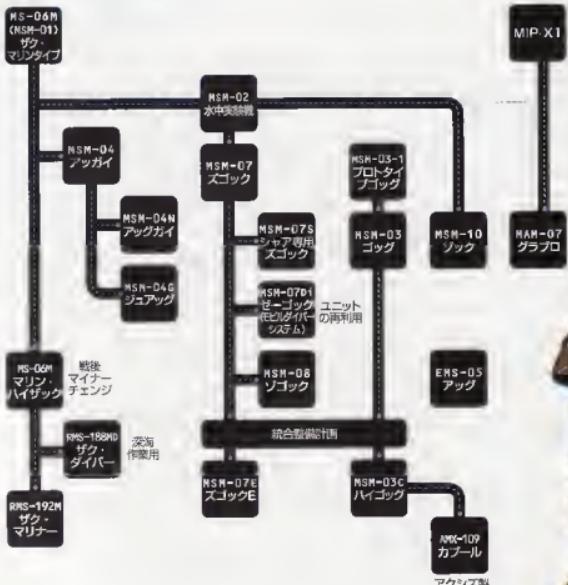
『機動戦士Ζガンダム』以降、モビルスィツが空を活躍の舞台に選んだ事と大いに関係している。それにより水陸両用機の活躍する余地がほとんどなくなつてしまつたのだ。

しかし、水陸両用の火は消えしなかつた。一年戦争のアナザー・ストーリーを描いたOVA作品や、宇宙世紀以外の世界を扱つた作品において、水陸両用モビルスーツは、必ずと言っていいほど登場しているのだ。それだけ、水陸両用機はガンダム世界に根を張つているといつていいのだろう。

本邦は、そいつた水陸両用モビルスーツたちを、宇宙世紀という世界観の中にある現実の兵器として捉え、あらゆる角度からその魅力をまとめたものである。本書を『魔晄』になる事で先人たちが榮き上げた『ガンダム・ワールド』の歴史とロマンの一部を、今一度確認していただければ幸いである。

マジンブリッド・

水陸系統図





モビルスーツ モビルアーマー 水陸両用MS&MA カラー設定画&イラストラインアップ

このページでは宇宙世紀に登場した歴代の水陸両用モビルスーツ（モビルアーマー）のカラー設定画とイラスト一覧を掲載している。なお、本誌にて機体解説、紹介がされているものはページアイコンにC対応ページ数を記載している。

MSM-04
アッガイ
P048



MSM-03
ゴッグ
P032



MSM-07S
シャア専用
ズゴック
P038



MSM-07
ズゴック
P038



MAM-07
グラブロ
P062



MSM-10
ゾック
P060





→
RMS-192M
ザク・マリナー

P056



→
MS-06M(MSM-01)
ザク・
マリンタイプ
(マリン・ハイザク)

P054



→
MSM-04N
アッグガイ

P050



→
AMX-109
カプール

P064



→
MSM-07E
エクスペリメント
ズゴックE

P040



→
MSM-08
ズゴック

P044

→
MSM-03C
ハイゴッグ

P034



⊕
ZMT-A31S
ドッゴーラ

P071

⊕
MSM-04
アッガイ
(第08MS小隊版)

P048

⊕
ZM-S06S
ガルガイユ

P070

⊕
MSM-07Dii
ゼーゴック

P042

⊕
RB-79N
フィッシュアイ

▲モビルダイバーシステム



MSM-04G
ジュアッグ
P052



EMS-05
アッグ
P058



MSM-03-1
プロトタイプ
ゴッグ
P053



MSM-02
水中実験機
P057



RAG-79-G1
水中型
ガンダム
P069



RAG-79
アクア・ジム
P068



F90M
F90
マリンタイプ
P070



0EX-04M+MS-06M
エーギル+
ザク・マリンタイプ
P071



性と戦略的価値

【歴史的背景】
ジオンはなぜ地上用兵器を開発していたのか!?

ジオン公国が本格的に地球連邦軍との武力衝突を考えたのは、いつ頃のことだろ?か。政治的情勢を考えると、おそらく宇宙世紀70年代はじめだろう。では、具体的にはどの程度の武力衝突を考えていたのだろうか。それに対しても、いくつかの可能性を考えることができる。

1つは、戦場を宇宙に限定することだろう。新テクノロジーであるミノフスキーライ子下の新兵器、エビルスース、によって地球連邦軍に致命的打撃を与える種の不可侵領域にすること。スペースノイド主導による惑星への生活環境を確立するといつ考え方だ。

宇宙世紀0079年1月3日、一年戦争の開戦から戦闘の最初の1カ月は、そういった戦略を前提に行われていたフシが伺える。

しかし、歴史をみれば分かるように、事はそれほど簡単には行かなかつた。ジオン公国軍がすべての兵力を挙げて行つた一週間戦争(1月3日～10日)、そして続くルウム戦役(1月15～16日)という作戦行動において、その結果勝利はしたもの、大戦を短期間に終わらせるという自論見は、捕虜だつたレビル将軍が連邦軍に帰還を果たし行つ





水陸両用 モビルスーツ小史

その誕生の必要

た、「オニに兵なら」の演説の前にも
ろくも崩れ去った。

そして宇宙世紀0079年3月1日、
ジオン公国はなじ崩し的に地球陸下作
戦を開戦。戦場は地球上へと拡大し、
その後、泥沼の戦況へと繋がるのだ。
このことからわかるのは、ジオン公
国は戦場を宇宙に限定する事を考えつ
つ、地球上全域を戦場にするという事
もまた、考えていたということだ。

その規模がどの程度であるにせよ、
少なくともジオン公国軍が、最初から
地球上にまで戦線を拡大させる意思が
あつた事は間違いがないだろう。それは、
本来ならコロニーでは必要がない兵器
を大量に開発・生産していた事から伺
える。ドップヤド・ダイヤS、ガウ攻
撃空母のような航空兵力は、コロニー
という環境において、必要がないばかり
でなく、飛行実験を行ふことすらま
まならない。

また、マゼラ・アタックやダブデ級
陸戦艇などの地上兵器も、コロニーで
はいたずらに火力が強いばかりで、危
険な兵器である。つまり、ジオンの地
上用の兵器は、開発はしていたものの、
宇宙という戦場では活躍の場がほとんど
ないのだ。これだけを見ても、ジオ
ン公国が本格的な地上戦を想定してい
たことがわかる。

しかし、これら地上用の装備の開発は、
並大抵の事ではない。何しろコロニー



という環境では、実機による試験が難しい。おそらくその開発はコンピュータによるシミュレーションに頼つていただという状況であろう。このよくなデータ主導の状況による開発は、地上で出来うる様々な不測の事態において、対応できない機体を産み出す恐れがある。

また、運用には兵士たちの育成・訓練も当然必要になるが、これもシミュレーションが中心になる。さらにそのノウハウの確立もジョン公国軍にとって、負担になつたはずだが、それを押してまで地上兵力を整備したという事は、本格的に地上を戦場にすると考えていたが、もしくは戦いは宇宙で済ませ、その後の交渉で、ある程度の地球上の領土の割譲を想定し、その駐留軍といふ役割をも視野に入れていたのかかもしれない。

そういう意味では、地球陸下作戦において、軍需産業や工場が集中していたとされるキャリフオーリニアベースを左右する事だったのかもしれない。

【歴史的背景】 なぜジョンは海上戦力を必要としたのか

この地球侵攻作戦からも分かるよう

に、ジョン公国軍は海上戦力の整備も

視野に入れていたようだ。

戦略という視点で見ると、俗に陸海

軍事と言われるよう、海上戦力は主

要な武力の一つであるが、同時に特殊

な戦力であるとも言える。

実際、国家レベルの軍隊の整備状況

を見ても、海軍力が充実している国家

もあれば、それほどでもない国家もある。

これはどういった事なのだろうか。それは、

海の戦いの歴史を紐解いてみると分か

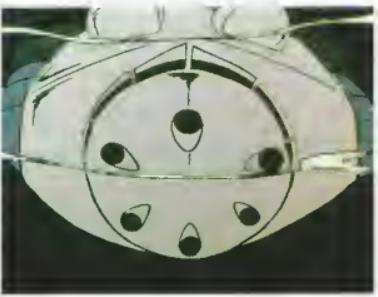
り易い。

海の戦い、その発生する原因とし

ては必ず一定の条件が存在する。それは、

海運が存在する」といた。

古くは海軍と言えば、ギリシャ、ロ



緒であると言えるだろう。しかし、そ

の時代において、わざわざ海戦で決着をつける必要はどこにあったのだろうか。大砲などが存在しない時代、海の戦いは、互いの船に乗り移る肉弾戦であり、船の勢力が及ばない場所に行けばほぼ無力化される。トロイ戦争のように異国の侵略の手段として船を使う場合もあったが、必ずしも船を使用する。海戦というわけではなかった。

ではなぜ海の戦いが起きるのか。それは海を制する事で戦いの趨勢を決める事ができるからに他ならない。つまり、海の戦いで負けると、戦闘能力に重大な影響をもたらす、という条件があつたのだ。それは、人類の構築した社会で、海が果たすもとも大きなる役割と不可分ではない。

海とは、食料資源の宝庫でもあるが、それとは別の利用法、もつとも重要なのは物資の運搬、輸送である。海を行く船はものを運ぶ道具の中、その速度はともかくとして、もつとも大量のものをもつとも効率よく運ぶことができる手段である。実際、現在の世界でも、重量のあるものや、容積のあるものの長距離輸送は、海が使用できる環境である以上、そのほとんどが海運が利用されている。

それゆえ、船を効率的に使用できる地勢においては、船を利用した流通のシステムが出来上がり、繁栄するのは





水陸両用MSを読み解く

5大特長

一年戦争時、シオン公国軍が用いた水陸両用機は、どれも優秀な機体だったといわれている。ここでは、その「優秀さとはどんなものなのか?」を5つの特長としてまとめてみた。

モデル: MSM-07ズゴック

① 大出力ジェネレーター

性能面において、他の機体よりも水陸両用機が優れている点がこれ。冷却に水を利用しており、その結果、高出力をジェネレーターが搭載でき、ビーム兵器も装備が可能だったというのもポイント。



② 首がない

とにかく、水中で行動する際には、余計な部分は省いて、なるべく一體化されているのが健ましい。そうしないと水の抵抗が大きくなるし、水圧による機体の損傷にもつながりかねないのだ。



③ 手腕がジャバラ

人型のよう各箇所ごとのブロック構造ではなく、蛇腹状のユニット、フレキシブル・ペロウズ・リムで構成される。この機構により、ハイパー・ハンマーの一撃を受け止めたり、機体の跳躍などが可能である。



④ 防圧ボディ

水中という厳しい環境に対応できるように、潜水艦と同様の耐圧船体構造を機体に採用している。これによって水陸両用機の多くのシリエットが、丸みを帯びた球状となっているのだ。



⑤ 脚部クロ

MSM-03
ゴックの
アイアン・
ネイル



MSM-10
ゾックの
アイアン・
ネイル



形状は様々だが、通常機のようにマニピュレーターではなく、アイアン・ネイルを採用している機体はほとんど。ただし、白兵戦における格闘戦でアッタリ、機体固定用ブレーカーなど、その用途は様々

歴史を見るまでもなく明らかだ。逆に言えば海戦が起るのは、こういった船を使った流通システムが確立しているところである。つまり、それらを遮断することは、戦争継続能力を減じさせることに繋がるのだ。もちろん航路の確保は宇宙世紀の世界でも重要な一つことは間違いないだろう。

たとえ、陸上の戦い不利であっても、海路で武器や補給物資、新たな兵力を捕給し続けば、戦争は継続できる。もちろん近代以降の戦いにおいては、それには制空権の確保が必須となる。それだけではすべての船の往来を制限する事は不可能で、制海権の確保こそが重要なのだ。

しかし、ジオン公国は、制海権こそ必要だったものの、海運という口ジスティックはそれほど重要視していなかつた。おそらく、補給は宇宙からするので間に合っていたであろうから。むしろ、地球連邦軍の海運による補給を阻止する事こそが、ジオンが作るべき海軍の次める姿であろう。

水陸両用モビルスーツが必要となるふたつの戦場

〔歴史的背景③〕

これに似ているのは、第一次世界大戦、第二次世界大戦のドイツだ。基本的に陸軍国であるドイツは、敵国であるイギリスは海洋国家ではなかつた。そ

れゆえ海軍力は、イギリスの方に分があつた。

こうした状況を開拓するためにドイツ海軍がとつたのは通商破壊である。

つまり、イギリスをはじめとする連合国軍となるべく正面から戦わずに、輸送艦を少しでも多く撃沈する事で海運を妨害するのである。この作戦の主役になつたのが潜水艦であるシボートだ。潜水艦は戦艦などに比べ安価に製造でき、隠密性が高く、通商破壊という任務にぴったりだった。つまり、海戦で制海権を得るという事を最初からあきらめ、ギリラ戦法に徹したのだ。

これと同様状況がジオン公国軍につつた。自軍にとつては敵の通商を破壊する事だけで海の戦いは事足りた。しかし、ドイツと違いジオン公国軍には、その手段をどう調達するかという問題があつた。物資や装備、人員としての船乗りもほんのりなければ、海上戦闘用のノウハウもないに等しく、訓練方法も限定される。組織的な海軍を作らる事はほとんど不可能だっただろう。こうしたことを解決する切り札こそが、モビルスーツの水中利用という考えだつたのだ。

また、通商破壊と並ぶもう一つの命題は、いわゆる海兵隊的な水陸両用作戦である。水陸両用作戦とは、いわゆる上陸作戦を指し、敵の支配地域に對して強攻

その必要性は、宇宙時代には衛星軌道上からの陸上作戦の登場により、機動戦闘を行ひ、陸海空の兵力を投入する作戦である。これは、戦争自体を勝利に導くためには不可欠とも言えるものである。

道上から陸上作戦の登場により、機動戦闘を行つたであらうが、まったく価値がなくなつてはいないだらう。こうした部分を補完するのに、ジオンはモビルスーツを使用する事にする特徴その場所が不明であつた地球連邦軍の根拠地・ジャブロー攻略は、密林であるアマゾンという地形上の問題もあり、水陸両用モビルスーツの重要性は大きかつただらう。

水陸両用モビルスーツが登場は、ジオンが地上で作戦行動を行うために、必要不可欠なものだつたのだ。

水陸両用モビルスーツに求められる特殊要件とは?!

人類初のモビルスーツ、ザクが、当初の仮想敵がモビルスーツではなく、宇宙戦艦や戦闘機であったように、水陸両用モビルスーツの仮想敵は、潜水艦や戦艦、そして対潜哨戒用の航空機であったはずだ。

そしてその求められる要件は2つ。1つは通商破壊に適した能力だ。これは海中での航行能力、潜航(潜水)能力、そして敵の対潜哨戒機や対潜艦に対する対抗する能力が求められた。

具体的には潜航能力は、一定の深度に耐えられる耐圧船殻、高速での潜航に必要なパワー、船を沈める武装が求められる。武装は、魚雷とミサイルなどが適当である。

そしてもう一つの要素である水陸両用作戦においては必要なのは、耐弾性能と火力、機動性だろう。しかし、耐弾性能を上げる事は、装甲の厚さが求められ重量が増す。火力は、この当時の最大の威力を誇る、ビーム兵器の装備が望ましい。その上で機動性を向上させるには大馬力が必要だ。

通商破壊作戦と水陸両用作戦に、
な要素は、ある部分は合致するが、
反する部分も多い。しかし、水陸
モビルスーツは、それを高次元で
することができた。それこそが、
両軍の、成功の理由なのだ。
しかし、他の戦場と同じように、
ルース-1だけでは戦力を整備するの
理があった。それはジョン公国軍團
も分かっていたようで、地球陸軍
の折に、地球連邦軍の潜水艦を手に
手を入れた。モビルスーツの補給
の母艦として必要だったからだ。

制海権を手に入れた
水陸両用モビルスーシ

水陸両用モビルスーツが登場は、ジョンが地上で作戦行動を行ったために、必要不可欠なものだったのだ。

人類初のモビルスーツ、ザクが、当初の仮想敵がモビルスーツではなく、宇宙戦艦アーヴィングという二、三

陸両用モビルスーシの仮想敵は、潜水艦や艦戦、そして対潜哨戒用の航空機であつたはずだ。

そしてその求められる要件は2つ。
1つは通商破壊に適した能力だ。これ
には海上での航行能力、潜航（潜水）
能力、そして敵の対潜哨戒機や対潜艦
に対する対抗する能力が求められた。

結果的に水陸両用モビルスーツは、ジオンが短期間に海軍を整備するのに大きく寄与した。実際、その能力は相違なく定以上とも言えるものだった事だろう。それは、宇宙世紀0079年8月11日に行われたミッドウェイ海戦で地球連邦軍艦隊はジオンの水陸両用モビルスーツ群に優越的な損害を被った。連邦艦隊には対モビルスーツ戦の腕はなかったのです。一概に判断することは出来ないが、この戦いで少なくとも從来の海軍の從来の戦法ではなく、モビルスーツに対抗できないと言つては証明された。また、その翌月の9月にはジオン海軍は大西洋の制海権をほぼ手中にする。

その後、11月にはアイルランドへのルファースト基地や、ジャブロー基地で水陸両用モビルスーツのもう一つの戦略目標である強襲作戦が展開されるが、こちらの方は敵側にもモビルスーツが配備されたことや、充分に戦力が足りなかつたため、芳しい結果を残すことにならなかつた。

これら一連の戦いにおいて、水陸両用モビルスーツの弱点もまた、見えてきた。空からの攻撃に弱く、また空への攻撃力などは、少々難があつた。ビルスースン戦において、火力や武装面は有効だつたが、機動性はそれ程度でもなく、圧倒的有利足り得ない事などが挙げられる。

モビルスーツは、従来の戦略体系の中では突出した存在だが、モビルスーツ単体よりも、モビルスーツを中心とする戦略体系の構成要素としての効果的な利用につゝ戦力を構成する方が効果的なのは、第一戦争の地上戦において地球連邦軍が証明した。水上における戦いもまた、同様だったと言えるだろう。

水陸両用モビルスーツは、宇宙世紀80年代の後半以降、ガルダ級などの超大型輸送機が実用化や、モビルスーツの活動領域が空に及ぶようにして、その必要性は薄れていき、その用途は限られたものになっていく。やはり、一つの兵器体系だけで海軍を作るのは、無理があつたのだ。



水陸両用 モビルスーツの戦場

水陸両用モビルスーツの実戦配備が確認されたのは、一年戦争も後期。オデッサ作戦も終了した後ということで大局的には大きな影響を与えたとは考えにくいが、ジャブローなど投入された戦場では、その優位性が際立っている。ここでは彼らが活躍した主な戦場を振り返る。



A ジオン公国軍キャリフォルニアベース



▲もともとは地球連邦軍の基地だったが、ジオン公国軍の第二次大戦駆逐作戦によって占領される。その後、ユーコンをはじめとする潜水艦を奪われただけではなく、以後はジオン軍の拠点となる。

B 地球連邦軍ジャブロー基地



▲1900年代中盤まで、地球連邦軍の本部として機能していた基地。天然の大穴洞を利用して作られた同基地は、堅い岩盤に守られ、またその位置は厳重に秘匿されていた。

C 地球連邦軍北極基地



▲RX-78NT-1アレーネーがジャブロードーなど大規模な施設ではなく、小規模な北極基地から宇宙に向けて打ち出されたのは、その行動をオレン軍に制限されないための指標だという。

D 東南アジア戦線



▲（左）地球連邦軍（右）ジオン軍（サラン専念基地）があり、終戦間際にまで連邦軍とジオン軍の小競り合いが展開していた。湿地帯ということで、水陸両用モビルスーツも有效地に活躍した。

E 地球連邦軍ベルファスト基地



▲北アイルランドにある、世界の端。ヨーロッパの大部分はジオン公国の勢力圏であり、同基地は連邦軍の生命線だったのだろう。基本的に港湾基地だが、厳重な防衛ラインが引かれている。

F 大西洋上空



▲シャーローへ向かうホークヘッド・スナガーン、ファンの通常部隊が会戦した大西洋上の戦闘ということで、水中用モビルアグラブロにとって圧倒的優位と思われた。



ベルファスト襲撃

U.C.0079.11.19 ~ U.C.0079.11.21

参 加 人 員

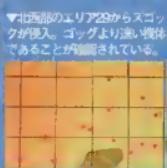
シャア・アズナブル/フランガン・ブーン
シーウ・ラサ・マーク/カラハノモリ一也

投入モビルスーツ

ゴッグ・ズゴック

第1陣

第2陣



▲海上ではゴッグGマークを攻撃。だが攻撃を心得かず、ムロに、あっさりと奪還されてしまう。



▲倒的ないで、アムロの攻撃を防ぐ。水陸両用型のパワーを発揮される。



▲水陸両用型のGマークを攻撃。ガジダムを引きずったまま海へと飛び込む。パワーで有利な戦闘が可能となる。



▲ガジダムを引きずったまま海へと飛び込む。パワーで有利な戦闘が可能となる。

▼エリア22から進入するゴッグ2機。隊長がユーローンからエリート。



▲アムロのGマーク、Gフレームを攻撃。ビームキャノンアーマー。陸での機動性が低いゴッグだったため、Gフレームで射撃できたのかもしれない。



▲アムロのGマーク、Gフレームを攻撃。ビームキャノンアーマー。近接戦闘で敗北を喫する。



▲海中に設置された機雷でも、大きなダメージは受けないゴッグ。さらにはブリーチ・バーで放出し無力化する。



▼ビーム兵器の使えないガーターはハイパー・ハンマー装備で出る。だが効果的なダメージ。



補給基地への奇襲で 真価を発揮した水陸両用型

21世紀では北アイルランドの首府であつたベルファスト。北西の入り口にあり、ちょうど現代ではジョージ・ベスト、ベルファスト・シティ空港と呼ばれる空港があり、これがベルファスト基地の前身となつた可能性もある。一年戦争においては、オーディッサ作戦を終えたホワイトベースの補給を行つた基地であり、ヨーロッパのほとんどをジョン公園軍に掌握されていた連邦軍にとつて、残された数少ない拠点であつた。会話の中で「補給基地」という表現があり、特に補給という目的で特化した基地だった。

ジャブローへ向かう前に、ベルファストで応急修理をすることになつたホワイトベースだが、復活したシャアのマッド・アングラー隊のこの動きをキヤッズ。宇宙世紀0079年11月19日、まずは上陸した船がホワイトベースであるかを確かめるために、2機のゴッグが先行して出撃した。さらに2日後、ホワイトベースの行く先を探るべく、スパイ107号を潜入させるための陽動作戦を展開。ズゴック・ゴッグでベルファストを襲撃した。この作戦で4機の機体を失い、責任を感じたフランガン・ブーンは、さらに大西洋上で追撃作戦を実戦する。



△アムロの成長は予想以上だった。



◀ウッディのファイアンの攻撃より、スゴックのモノノイイをつぶれるアグシメントが。



◀シャアはボラスキンニに路を任せても、ジャックは支援用あり、至近距離で一ガンダムの動きにはまったく対応できなかった。



▼下池の入り口から侵入したゴッグ2機は、ホワイトベース側の格闘負けを蒙り、苦戦なく撃墜される。



△アムロはアグシメントを攻撃して、アムロの攻撃も、シムの攻撃も、決定打にはならなかった。



◀Gブルから逃れたガンダムがタア専用ズゴック迎撃。ほぼ並んで飛び退避する。



▶シャアはガンダムの追撃を切り、水中へ脱したシャア。ジャッコロード攻略作戦は失敗だった。



◀ガンダムの追撃を切り、水中へ脱したシャア。ジャッコロード攻略作戦は失敗だった。



宇宙船ドッグの破壊を狙う。

からくも脱出に成功したシャアであつたが、すでにキャリッフルニアベトスからの援軍は全滅しかけていた。それゆえ、シャアは異なるアプローチで

そもそも隨伴する機体が支援用のソーファンファンの攻撃でモノノイイをつぶされるというアグシメントであり、このまま敗戦に終わるだ。

首尾よくホワイトベースを発見したシャアだが、その前に立ちはだつたのは、またもやガンダムであった。シャアとはい、相手がガンダムとなればその対応に追われる。予期せぬファンファンの攻撃でモノノイイをつぶされるというアグシメントであり、この

北極基地襲撃

U.C.0079.12.02

参 加 人 員 → ハーディ・シェクイナー／ミハイル・ガミンスキー／
シディ・スロース／ガブリエル・ラミレス・ガラシア
投入モビルスーツ → ズゴックE／ハイゴッグ



▲ローブスを襲撃に成功するサイ・ロブス。侵入と強襲に分かれ RX-78NT-1を撲滅する。



▲護衛のソムの追撃で、アーティは命を落とす。隊長のズゴックEが避け切るが、一歩遅かった。



▲ローブス。一度度の連いもあるが、改めて南向用モビルスーツ駆で終始ジムを圧倒した。

北極基地への奇襲も失敗に終わる

連邦軍が北極基地でRX-78NT-1の開発を行っている情報を得た連邦軍は、特務部隊サイクロプス隊を派遣。同機の奪取を目的とする。ユーコン級潜水艦U-99は、宇宙世紀0079年12月9日、ソバヤセムリヤ基地を出港。翌9日、ズゴックE 1機、ハイゴッグ3機という編成で出撃したサイクロプス隊は二手に分かれ、一方は海面通路から潜入し、もう一方は正面から陽動を仕掛ける。だが、すでに格納庫にRX-78NT-1の姿はない。シャトルにて宇宙へ打ち上げられる直前だった。ロケットモードで発進を阻止しようとするも、護衛のジムに阻まれ、奪取作戦は失敗に終わる。

東南アジア戦線

U.C.0079.-.-

参 加 人 員 → 不明
投入モビルスーツ → アッガイ



▲「アッガイ」と「ガル」。戦型ガンダムの頭部を吹き飛ばすさらにコキ。トを叩きます



▲アッガイ。ガル。どめを削そうとするアッガイ。だがエジアの指示で、ミケルのホバー・トラックが注意をそらす。だが、メインカラーモードを失い、スコープもきかない戦型ガンダムにはアッガイが扱うことができない。急速エレードアが目視で誘導、アッガイをピードで買く。



傷ついてもその力は悔れず

一年戦争後半に戦場へ投入された水陸両用機アーティは、潜水艦部隊だけではなく、一部はアジアの湿地帯にも配備された。コジマ大隊が駐留する東南アジア戦線でも配備が確認されている。コジマ大隊所属の第08MS小隊は、空挺降下によって敵基地の所在を突き立てる作戦を展開。先行して降下した1機の陸戦型ガンダムは、水中から発進したアッガイの奇襲を受けて頭部を一撃で吹き飛ばされている。水陸両用機の並はすぐれた出力を誇示している。一方、このアッガイは右腕を破壊したまま出撃している。



水陸両用機の実力とは!?

水陸両用機のライバル機たちと
水陸両用機の性能を比較テスト

モビルスーツとしては特異な存在である水陸両用機。
実際の所その実力とはどの程度のものだったのだろうか。
ここでは、一年戦争におけるライバルである
地球連邦軍の機体たちと比較してみよう。

ズゴック・ガンダム

究極の量産機であるズゴックは
プロトタイプのガンダムとほぼ互角!



RX-78 ガンダム	MSN-07 ズゴック	
180m	頭頂高	183m
42t	本体重量	82t
58.8t	全備重量	159t
1250kW	フェネレーター出力	1740kW
55,500kg	スラスター推力	121,000kg
チタン系合金	装甲材質	超硬スチール合金

アイアン・ネイル×2、
頭部6連装ミサイル砲、
メガ粒子砲×2

のMS-14ゲルググが登場するまで、
もともとその性能が高かった機体が、
地球連邦軍のRX-78ガンダムである。
一年戦争における宇宙用/陸戦用の
モビルスーツのなかで、ジオン公国軍

採用と
ルナ・チタニウム合金の軽量
かつ堅牢な装甲、そしてビーム兵器の
搭載だ。その結果、総合性能は同時
期のMS-06ザクIIを大きく上回る性
能を見せることになり、一種の戦場伝

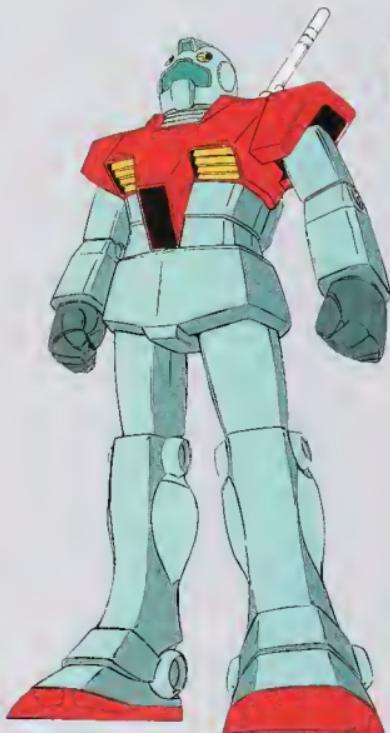
説と化した。
しかし、ここで忘れてはならないのがRX-78とは、あくまでプロトタイプであり、少数しか生産されなかった事。
一方MSN-07ズゴックは、ある意味、
量産モビルスーツとしては究極の性能
を具えている。

まずはその両者の性能面を比較してみよう。ガンダムのジェネレーター出力は1380キロワット、対するズゴックは2480キロワットと、実に1100キロワットもの差を付いている。これを出力/重量比で比較すると、ガンダムの1トンあたりの出力は約23.5キロワット、ズゴックのそれは約26.5、割合でズゴックが優る。ちなみにザクの場合は14.5、ゲルググの場合19.6なので、ガンダムとズゴックの差は実際の作戦行動においては、それ程差がなかったた



一方スラスター推力は、ガンダムが5万5千500キロに対し、8万300キロ。同じく1トンあたりではガンダム925キロ、対するズゴックは861キロと、ガンダムが上回るが、やはりその誤差は「割に満たない」。

これらは単純計算ではあるものの、ガンダムとズゴックの性能差はほとんどないと考えるべきだろう。



ゴジグ・ジム

性能的にはジムの圧勝だが
ゴジグの重装甲を活かせば……

重いゴジグに軽いジム

ム・サーベルとクロードでは、ビーム・サードの方がリーチが長く、ガンダムが有利だ。装甲に関しては、いかにズコックにはミサイルがあるが、こちらの威力はズコックに多少のアドバンテージがあるだろう。近接兵器のビーム・サーベルとクロードでは、ビーム・サードの方がリーチが長く、ガンダムが有利だ。装甲に関しては、いかに

ズコックにはミサイルがあるが、こちらの威力はズコックに多少のアドバンテージがあるだろう。近接兵器のビーム・サーベルとクロードでは、ビーム・

サードの方がリーチが長く、ガンダムが有利だ。

武器の前に無力に近いので、若手有利といった程度だ。

総体的にはこの2機の実力はほぼ互角といつていい。実際には、ジムもそれが差がないだろう。

もし勝負となれば、状況やバイオットの技量、戦法の勝負となるだろう。それでも水陸両用型のズコックは、冷戦は控えたい所だ。

ンあたりの出力は約11。推力は12万000キロで、1トンあたりは約75.9キロ。これにジムは出力125.0キロワット。1トンあたりの出力は約21。推力は5万5千500キロで1トンあたりは約94.4キロと、どちらを取つても大幅にジムの方が上回っている。つまり、性能的にはジムの圧勝なのだ。ズコックと違い、「ジグ」は完全な水冷式のモビルスーツだ。ゆえに水上での行動時間はそれ程長くないはずだ。そういう面でも、ジムの方

が圧倒的に有利だ。加えてビーム兵器の威力もゴジグがジムを大幅に上回るというところはないだろう。

史上初の水陸両用機であるゴジグ。対戦末期に戦線へと投入された地球連邦軍の主力モビルスーツであるジム。実際に戦場でもつども戦闘が行われたであろう組み合わせといえるだろう。

ここでは主に地上での戦いについて考えてみよう。まずは前項のようそこのスペックから比較してみたい。ゴジグの出力は1740キロワット。1ト

MSR-79 ジム

	MSN-03 ゴジグ
180cm	頭頂高
41.2t	本体重量
58.8t	全備重量
1250kW	ジェネレーター出力
55.500kg	スラスター総推力
チタン系合金	装甲材質
	超硬スチール合金

バルカン砲×2、
ビーム・スプレーガン、
ビーム・サーベル、他

アイアン・ネイル×2、
腹部メガ粒子砲×2、
腹部魚雷発射管×2

えれば、それこそがゴツグの役割といえる。ただし、自慢の重装甲もビーム兵器の前で、どれほど効果が發揮でき

るかは疑問も残る。

こちらの方は、スラスター推力で圧倒的にゴツグが有利であり、より水中機動に最適化された形状もあり、アクア・

ジムはゴッサの敵ではないだる
中戦用に特化したゴッサと、水
える程度のジムの差ともいえる



アツガイ・^{VS}陸戦型ガンダム

アッガイが
ガンダムに勝つ！
金星の可能性も……

機動力	武装	機動力	武装
機動力	武装	機動力	武装
機動力	武装	機動力	武装
機動力	武装	機動力	武装
機動力	武装	機動力	武装

以外にも高い?
アツガイの性能

MS-06ザクIIのジェネレーターや
部品を使い、廉価版の水陸両用モビル
スーツとして開発されたアッガイ。そ
の性能面はゴッグよりも優れた点多
い。だが、それでも廉価版として扱わ

れたという事は、見た目のスベ、ツク以上に問題も多かったのだろう。
さて、ここで比べるのは、東南アジアで、これまでに戦えたPA-X、[9]、RX-78、[5]、RGM-79、[6]、陸戦型ジムの上位機
アーヴィングで、戦えたのはPA-X、[9]、陸
戦型ガンダムだ。プロトタイプである
RX-78、ガンダムより、実質的には
RGM-79、[6]、陸戦型ジムの上位機
という位置づけと言える機体だ。

まずははざっくりと性能を比較してみよう。アッガイの出力は1870キロワット。1トンあたりの出力は約10キロワット。10万5000キロワット。1トンあたりは約1127キロ。これに対し陸戦型ガンドムは出力1350キロワット。1トンあたりの出力は約187キロ。1トンあたりの出力は約187キロ。1トンあたりは約5万2500キロワット。1トンあたりは約5万2500キロワット。

また、アッガイはビーム兵器を搭載しているのに對して、陸戦型ガンドамはビーム兵器を使用することは出来るが限定的だと思われ。基本的にはマシンガンなどの実体弾兵器をその装備の中心としている。陸戦型ガンドamのルナ・チタニウム合金は、さすがにムバク兵器に対する耐弾性はそれほどでもなく、それに對し、アッガイの方は水陸両用らしい重装甲を纏っているため、実体弾兵器への耐弾性は、少なくともザクレベルよりは上回っていると考えられる。

もちろん、戦況や条件、水冷エンジンを積んでいたアッガイの地上での行動時間の制限など、様々なファクターはあるものの、意外や意外、アッガイが陸戦型万ンダム相手に金星を擧げる可能性は少くはないのだ。



ゾック・ガンキヤノン

技のガンキヤノン、力のゾック
コンセプトの違う2機



RX-77 ガンキヤノン		MSN-10 ゾック	
17.5m	頭頂高	23.9m	
51.0t	本体重量	167.6t	
70.0t	全機重量	229.0t	
1,380kW	ジェネレーター出力	3,840kW	
51,800kg	スラスター総推力	253,000kg	
ルナ・チタニウム合金	装甲材質	チタン・セラミック複合材	
バルカン砲×2、 240mmキャノン砲×2、 ビーム・ライフル、他	头部フォノン・メーザー砲、 肩部メガ粒子砲×8		

支援の質が違う!
両機の武装構成

さて、対決コナーの掉尾を飾るの
は支援用モビルスーツ対決だ。この2
機種がつぶり組んで戦う可能性はほ
んどないが、まずは一応その性能を
比較してみよう。

ゾックの出力は384.9キロワット。
1トンあたりの出力は約17。推力は10
万の600キロで、1トンあたりは約
110.4キロ。これに対しガンキヤノ
ンの出力は約18。推力は5万25
00キロで、1トンあたりは約7.40
キロ。出力比はほとんど同等。推力は1.
5倍となる。さすがに劇中でゾックの
ジャンプ力はザクの数倍と言われるだ
けのことはあるが、実際数値を比較し
てみると、ザクの重量/推力比は約6.
45。ゾックのそれはザクの1.7倍
という結果になる。実際の性能は数値

すべてを表せるものではないが、3
倍はちょっとと評判先行だろう。その噂
をいぶかしんだあたり、さすが赤い彗
星のシャアといったところだ。

さて、ゾックとガンキヤノン、双方
とも支援型（砲撃型）であるから、直
接接続合戦という状況はちょっとと考え
にくいので、砲撃支援型としての性能
を比べてみよう。

ゾックはメガ粒子砲を8門と強力だ
が、実質的に使用できるのは、前後面

のどちらか4門となる。これは巨大な
体の機動力不足を解消するための措置
と言ふだろう。

一方でガンキヤノンの主武装は、実
体弾兵器である24.0ミリ無反動砲2
門と、長距離射撃用ビーム・ライフル
が1門だ。総合的な火力の面だけを見
るとゾックに重配が上がる。しかし、
ガンキヤノンの無反動砲は、通常弾で
榴弾や焼夷弾、徹甲弾など用途に応じ
て弾種の変更が可能だ。ビーム兵器
が苦手とする遮蔽物をまたぐ山なり
の曲射砲撃も可能だ。また、副次的な
ビーム兵器も総体的に戦闘で柔軟性を
持たせられる。もちろん、ゾックはサ
ポート役にゴッグなりズゴックなりが
随伴するので、それらを活用すれば柔
軟な作戦行動が可能だ。

総合的には、ジムを中心に機動性と
柔軟性のあるガンキヤノンと、長距離
砲撃のガンタンクを擁する連邦軍の方
が、ゾック、ゴッグ、ズゴックの組み
合わせのジオン軍より、広いレンジで
柔軟な作戦を展開できるだろう。

機の深い展開力を持つ連邦軍に対し
て、ジオン軍は正面突破を強いられる
かもしれない。

ゴツグ系

ソイマット社の装甲技術を生かしたゴツグ。様々な問題点を抱えていたといわれるが、重装甲をはじめとする多くの長所で、圧倒的な存在感を示した。

通商破壊で能力を示し、モビルスーツ戦にも対応

ジオニック社でスタートした「モビルスーツザクの水中対応」というプロジェクトはザク・マリンタイプによる各種実験を経て、ソイマット社にも基礎データがもたらされた。その後のジオニック、ソイマット、M・P、各社の水陸両用モビルスーツ開発はほぼ同時期にスタートしたと考えられるが、ゴツグはM・S・M・03の型式番号が示すとおり、中でも比較的初期に開発が行われたと考えられる。それはゴツグのコンセプトからも推測できるだろう。

水中での巡航に適した構造や、腹部に武装を集中した構造は、陸上では射角に制限がある。また、面を意識した

クロ一も艦船の船体にダメージを与えることに適しており、こうした要素からゴツグが海中での行動を中心とし、通商破壊を強く意識した機体であることがわかる。

開発時点で連邦軍のV作戦の情報をジオニック軍がキャッチしていたかは不明だが、ゴツグは対モビルスーツ戦をそれほど考慮していないかったことがうかがえる。

それでもベルファストにおいて、方ダンムと瓦屋以上の戦闘を展開した背景には、水陸両用モビルスーツがもつボテンシャルの高さぬえだろう。ハイパー・ハンマーを両手で受け止めたばかり、アムロにビーム兵器がなければ通用しないと判断させた重装甲。アムロが初めて遭遇したゴツグは、グフや

クロ一も艦船の船体にダメージを与えることに適しており、こうした要素からゴツグが海中での行動を中心とし、通商破壊を強く意識した機体であることがわかる。

開発時点で連邦軍のV作戦の情報をジオニック軍がキャッチしていたかは不明だが、ゴツグは対モビルスーツ戦をそれほど考慮していないかったことがうかがえる。

それから

既存兵器の攻撃は全く通用しなかつた。これはバイロットにとつても、大きな安心感につながったはずだ。

こうしたゴツグの特性は、意外なことに「統合整備計画」において大きな転換を迫られる。陸上での運動性を重視した機体構造への見直し、頭部にミサイル発射管、腕部にビーム・カannonを移設させた構成は、ゴツグに近い。いわばソイマット社製のズゴツクといえる構成となつた。

これは連邦軍のモビルスーツ配備が一般的になり、ゴツグに要求される性能が変化していったからとも考えられる。ゴツグの初期コンセプトは、時代の要求が生んだ一瞬の輝きだったのか

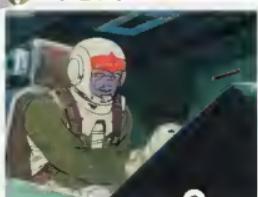
もしれない。

2

AMERICAN MOBILE SUIT

■クローズアップポイント■

④コクピット



機体中央部に設置される

一般的なモビルスーツと同様。機体中央部に備える。重装甲であるため、機雷が爆発した際の衝撃も伝わりにくいのかかもしれない。

④頭部

頭部は不可動 モノアイ可動範囲も制限

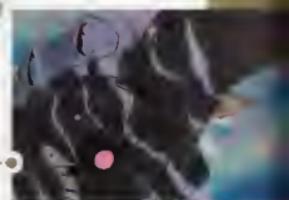
水陸両用機では珍しく広範囲のモノアイレールを備えていない。先端部には、水中の機雷や爆雷を無効化するフリージーヤード発射口を備える。



④武装

腰部に武装を集約

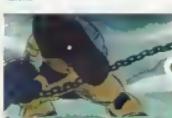
戦闘が武器ユニットがされており、2門のメカ粒子砲と2門のミサイル・ランチャーを備える。だが射角の自由度は低く、ハイゴッグではズゴックに近い武装の配置に。



④ジェネレーター

専用の水冷式動力 ユニットを搭載する

水陸両用モビルスーツ専用に開発された水冷式ジェネレーターを搭載。冷却面では有利で、ビーム兵器の使用も可能となつたが、冷却水のために重量は増加。



④脚部

陸上には不向きな歩行ユニット

各間節にはシーリング処理が施される。あまり歩行には向かず、陸上で機動性はそれほど高くない。後継のハイゴッグでは、大幅に構造が改められる。



ズゴック系の進化

U.C.0079

MSM-03C

ハイゴッグ

統合整備計画
に則って改変。
運動性を重視し、
武装の配
置も変更する
など大規模
修を受け、

U.C.0079

MSM-03-1

ゴッグ

・スマット社開発
の水陸両用モビル
スーツ。特に通機、
破壊や拠点攻撃に
向く機体であ
た。



U.C.0079

MSM-03-1

プロトタイプ ゴッグ

すでにゴッグの基
盤は完成している。
腕部に蓄電式のミ
サイルポッドが装
着可能であった。

■ MSM-03

ゴッグ

Spec

頭頂高：18.3m
 本体重量：82.4t
 全備重量：159.4t
 ジェネレーター出力：1,740kW
 スラスター総推力：121,000kg
 装甲材質：チタン・セラミック複合材
 武装：アイアン・ネイル×2
 腹部メガ粒子砲×2
 腹部魚雷発射管×2
 フリージャード



武装

ゴッグは「内蔵式メガ粒子砲」を搭載した初のモビルスーツであるが、機体の使用方法（海中から艦船を攻撃する）から、光学兵器の活躍の場は少なかった。ただし、照射範囲は広いが威力は高くないため、沿岸施設の攻撃などを行った際には、施設をあまり手ひどく破壊せず、結果的には有用に働いた。

魚雷発射管

腹部に大型の魚雷発射口を持つ。船船に向けて撃つことは可能であるが、座勢を起こす必要があるが、スコッカでは改良され頭頂部に発射口が設けられている。

頭頂高：18.3m
 本体重量：82.4t
 全備重量：159.4t
 ジェネレーター出力：1,740kW
 スラスター総推力：121,000kg
 装甲材質：チタン・セラミック複合材
 武装：アイアン・ネイル×2
 腹部メガ粒子砲×2
 腹部魚雷発射管×2
 フリージャード

体形

航行時の抵抗を減らし、水深の圧力を耐えるため全般的にすくっとした曲線的な姿を持つ。



潜水能力と航海性能を重視したのが裏目に出た!?

M.S.M.-03ゴッグは、水陸両用セビル。一つとして量産された最初のモビルスビルである。その開発はツイマット社が担当しており、同社がドムに採用した熱核ホバー・ジェット・エンジンを転用した熱核水流エンジンを搭載することで、高推力を実現。水中では最高速度70ノット(時速約130キロ)で航行でき、また水中での機動性も良好だった。

ボディのモノコックシェルは耐圧殻兼装甲であつたが、頑強さを求めたため機体は重く、本体重量は約80トントン装備重量にいたっては約160トントンにもぼる。これはザクなどのモビルスーンの2倍以上だ。武装は、水中から艦艇を攻撃するた

めの魚雷のほか、巨大なアイアン・ネイルを装備している。また、ゲル状の物質を海中に放出し、機体のまわりに漂わせるフレイジーヤードで、機雷をある程度無効化することもできた。

ゴッグの初期的な武装としてメガ粒子砲が挙げられるが、これはジエネレーターの冷却に水を利用するというシステムの採用により、大出力化に成功した。だが、その反面機体全体における装備重量の増大を招いた。それでもメガ粒子砲の収束率が低いため威力も高くなく、加えて水中では減衰するため、実際の戦闘での効果があつたかは疑問もある。

潜水能力、航行能力や武装などをゴッグが持つこれら要素から考察すると、ゴッグの主な用途は水陸両用と言つてよい。これはザクなどのモビルスーンも水中戦だったと言えるだろう。海上上武裝は、水中から艦艇を攻撃するた

る行く地球連邦サイドの商船(輸送艦)、場合によっては隨伴の商船も爆破して海上封鎖を行うのだ。洋上(水中)を高速で航行し、敵艦を発見して攻撃を仕掛ける。護衛の駆逐艦にとつても、高速度で航行するゴッグを捉え機雷なり対潜ミサイルなりで迎撃するにはかなりの困難が伴う。

水中を主戦場とするゴッグだが、沿岸施設を強襲。占拠するような上陸作戦でも高い能力を発揮した。フレイジーヤードを用い、まずゴッグが先発隊として進む。敷設された機雷群を無効化しつつ、上陸したところでメガ粒子砲を使用して車両や建物などを広範囲に破壊。さらに重装甲を活かして自身が橋頭堡となり、後続のアッガイなりズゴックなりの上陸を支援する。という戦術だ。

ただし、重量過多や冷却能力を考えれば、上陸後の機動戦闘は、様々な制約を受けただろう。こうした性能面のマイナス要素が、ゴッグに水陸両用機として劣つた機体というレッテルが貼られた大きな要因だ。しかしそうした見解は考え方次第だろう。その航行能力と速度、潜行能力を活かした対艦戦闘能力こそ、ゴッグが評価されるステージと言えるからだ。実際、ゴッグは人知れず海洋封鎖を行い、経済的打撃という目に見える戦果に表れない

ジャブロー攻撃にもゴックなどと共に参加しながらも活躍した。

vsRXシリーズ

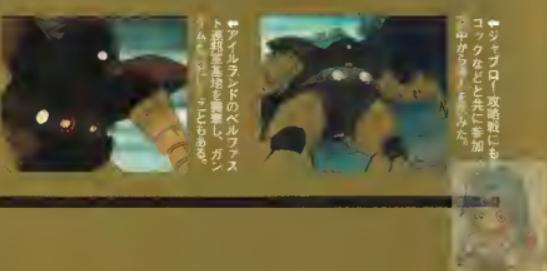
RX-78ガンダムと対戦したときはハイパー・ハンマーすらやすやすと受け止める。すさまじいパワーを見せ、機雷や車両からの攻撃にもびくともしなかった。しかしビーム・ライフルにはたやすく自慢の装甲を貫かれるため、陸上では動きが鈍くなりがちなゴッグは、これらの装備を持つ機体には「いい的」だろう。



◆ 設定画はP104へ

主な配備地域

北大西洋沿岸や北米大陸沿岸など、時期は短くとも主力機のため基本的には世界的に配備されている。だが、これもズゴックと同じくユーロン級潜水艦とともに通商破壊のため世界の海で活躍していた。また、ジャブロー攻略に備え、北米基地では常に一定数が配備されていたと思われる。



ジェットパック

簡便的に推力を向上させるブースターで、正面付近で点火しその推進力を使って一気に離ととの間合いを詰める（空中の飛行も可能）。

コンセプトの転換で
高評価を得たが……

統合整備計画とは、大戦末

期にジオン公国軍によって実行されたモビルスーツ運用の合理化、効率化を図るための

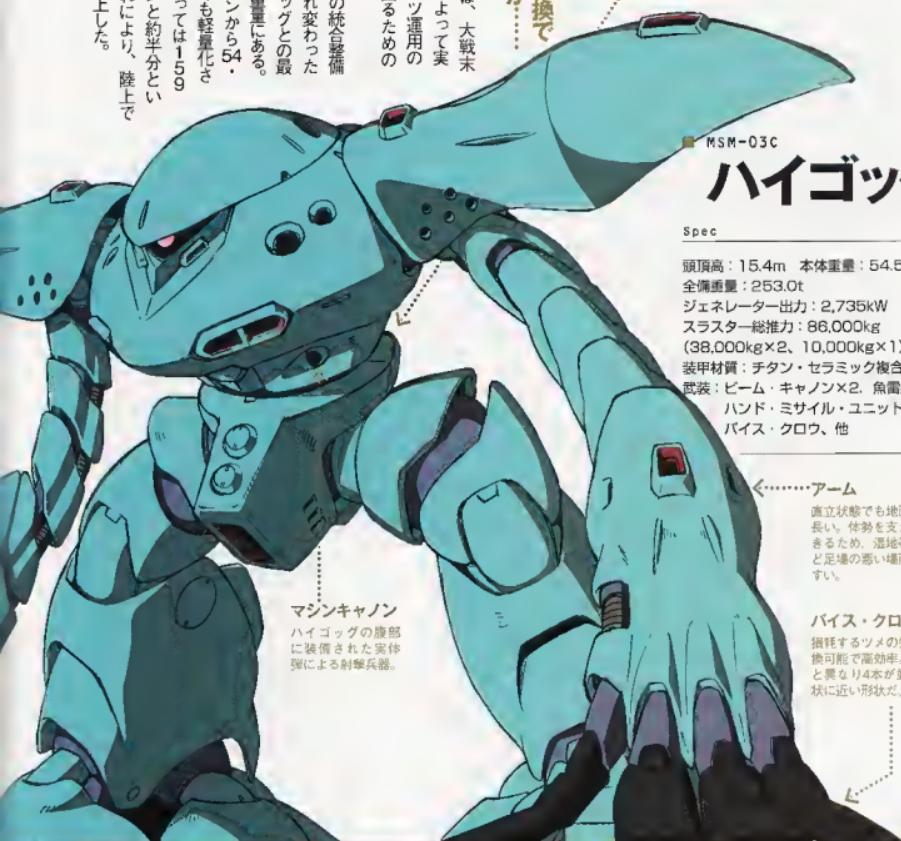
プランである。ハイゴッグは、その統合整備

計画によって「生まれ変わったゴッグ」である。ゴッグとの最も大きな違いはその重量にある。

本体重量は82・4トンから54・

5トンと30トン近くも軽量化され、装備重量にいたっては15.9

トンから79・2トンと約半分という軽さである。これにより、陸上で



武装

ビーム・キャノンは基本的にスコックEと共通のもので、連射性と威力に優れる。ハンド・ミサイル・ユニットはビーム・キャノンの発射口にマウントするため、装備の中にはビームによる射撃はできない。頭部には魚雷発射管を4基備える。また、武装ではないがズゴックE同様ジェットパックの装備も可能だ。



vsジム寒冷地仕様

スペック的にはズゴックEと同様、勝っている。加えてパイロット次第ではハイゴックの体形を活かしたトリッキーな動きで相手を翻弄でき、初見の相手には有利だ。ただし装甲はゴックほど丈夫ではなく、集中砲火を受ければあっさり撃破されてしまう。



ジエネレーター出力は27-35キロワットでズゴックEとほぼ同じで、どちらもミガ粒子砲を装備していることから見ても、ジエネレーターは基本的に同じものを搭載していると思われる。総合整備計画の一環だろう。

推力に関しては総推力こそ8万6000キロとゴックより低いが、背中にジエットパックと呼ばれる化学燃料ロケットを装備できるようになった。

しかし、このようにハイゴックを仔細に見ていくと難点が浮かび上がる。スピードや能力的に、ハイゴックはズゴックEとほぼ同等だ。特に運動性(引き抜き)と同時に、水中からの強襲揚陸用の水陸両用モビルスーツといえる。ズゴックEと大きく異なるのは直立姿勢で地面まで届く腕の長さだが、練のようにならせてクローラー攻撃時の威力を増加させ、格闘能力を強化している。

つまり、ゴックからハイゴックへ再設計される過程で、コンセプトがまったく違うものに変わっているのだ。そしてそのコンセプトとは、スペックから考察するにズゴックE(つまりはズゴック)と同様、水中からの強襲揚陸用の水陸両用モビルスーツといえる。ズゴックEと大きく異なるのは直立姿勢で地面まで届く腕の長さだが、練のようにならせてクローラー攻撃時の威力を増加させ、格闘能力を強化している。

そういう可能性もあるものの、本質的な相違点とまでは言えないだろう。なぜ、このように似た機体を2種類も生産しようとしたのか。考えられる可能性としては早急に数を揃えたかったということだが、それならハイゴックを製造するではなくズゴックEをライセンス生産するだけで事足りる。しかしそれをせず、別の機体を作つてしまふあたりは総合整備計画の不徹底さを表しているといえるだろう。

あるいはもしかしたら、ハイゴック開発の初期段階では本来のゴックのコンセプトである高い航行・潜水能力と重装甲を引き継いだ「本来のハイゴック」を開発する案があり、それを転用することで本機の誕生につながったのかもれない。

いずれにしろ、徒にモビルスーツの開発を発展するというジオン公国軍のモビルスーツ開発事情は、総合整備計画という合理化のあとでも変わらなかつたということだろう。このハイゴックからもそれは見て取れる「」ができる。

ジエネレーター出力は27-35キロワットでズゴックEとほぼ同じで、どちらもミガ粒子砲を装備していることから見ても、ジエネレーターは基本的に同じものを搭載していると思われる。総合整備計画の一環だろう。

推力に関しては総推力こそ8万6000キロとゴックより低いが、背中にジエットパックと呼ばれる化学燃料ロケットを装備できるようになった。

しかし、このようにハイゴックを仔細に見ていくと難点が浮かび上がる。スピードや能力的に、ハイゴックはズゴックEとほぼ同等だ。特に運動性(引き抜き)と同時に、水中からの強襲揚陸用の水陸両用モビルスーツといえる。ズゴックEと大きく異なるのは直立姿勢で地面まで届く腕の長さだが、練のようにならせてクローラー攻撃時の威力を増加させ、格闘能力を強化している。

つまり、ゴックからハイゴックへ再設計される過程で、コンセプトがまったく違うものに変わっているのだ。そしてそのコンセプトとは、スペックから考察するにズゴックE(つまりはズゴック)と同様、水中からの強襲揚陸用の水陸両用モビルスーツといえる。ズゴックEと大きく異なるのは直立姿勢で地面まで届く腕の長さだが、練のようにならせてクローラー攻撃時の威力を増加させ、格闘能力を強化している。

ビーム・キャノン
ズゴックEと共通のジエネレーターにより、高収束率メガ粒子砲(ビーム・キャノン)の使用が可能となった。

◆ 設定画はP118へ

■ 主な配備地域 ■

ズゴックEと機形的には寄るので、世界各地のジオン公国軍沿岸要塞に配備されている。さらにユーロン級潜水艦に搭載された状態で各地の海を航行中だ。足場の悪さに強いためアッガイとともに湿地帯やジャングルに配備された可能性もあるが、あまり高温のところはジエネレーターの能力が制限される難点もある。



◆ ユー・コンに格納され、世界の海を駆けめぐらす。しかし、大戦末期の勢力図では、まさに危険だ。



ズゴック系

ガンダムをもじのぐボテンシャルを秘めた高性能機

陸上用モビルスーツに迫る陸戦性能に、ビーム兵器を標準装備。M-I-P社が初めて手掛けたモビルスーツは、最初から名機と呼ぶにふさわしい性能だった。

歴史的性能には 圧倒的性能もあった

水陸両用モビルスーツの中でも最後発となるズゴック系は、M-I-P社のプロジェクトとして開発が進められた。もともとモビルアーマー開発に実績があり、モビルスーツの開発は行ったことのない同社だが、ジオニック社からの実験データの供与もあつたと考えられ、完成度の高いモビルスーツを送り出すことに成功する。

水空・冷房までのハイブリッド・ジェネレーターは高出力を示し、同社が得意とするビーム兵器の搭載を一般機に先駆けて成功。純粹な出力としての側面でも、陸戦機よりも大幅に重量が増してはいるが、パワーウエイトレシオではグラムずつも上回つた。

完成度の高さを誇る半面、その開発は大幅に遅れ、実戦投入はゴッグよりかなり後のことだったという。突出した性能を実現するために開発が難航した可能性もあるが、その一方で対モ

ビルスーツ戦を意識したことと、方向性の転換が行われた可能性もある。

たとえばゴッグのクローパー部分は、広範囲の面にダメージを与える対潜や

撃点攻撃を意識したものだが、ズゴックのアイアン・ネイルは点の攻撃リヨリビンポイントな攻撃対象であるモビルスーツを意識していると考えられ、突き刺す以外にも、はさむ、ひっかくなど、アクションの多様性も増している。

こうした「格闘用アーム」という考え方にに関しては、モビルアーマーで実績をもつM-I-P社ならではのノウハウが秘めていたのかもしれない。

生かされしているのだろ。

その後発令された統合整備計画においては、ズゴックEへと発展。パーソンの共用化、操縦系統の統合化といった同計画の基本コンセプトのほか、水流抵抗軽減を目的とした各部装甲形状の見直し、腕部のアイアン・ネイルへの変更などが行われている。

E型は純粹なズゴックの後継機である一方、その性能を陸戦型へと向けた機体がゾゴックである。ともすれば

の陸戦モビルスーツよりも優秀なズゴックの性能を、陸戦用として再設計したとしても不思議ではない。

こうした試みはズゴック以外、ガッシャのような次世代機の開発にも見られる。本機は水陸両用機以外に、ジオン主力機に革命をもたらす可能性すら秘めていたのかもしれない。



クローズアップポイント

→ コクピット



機体中央部に備えられる

ボディ中央の六角形のバーヴがコクピットハッチ。搭乗時には、レールが設けられ、エレベーターのようにハッチごと昇降する。機体サイズが大きいことから内部は広い。

→ 頭部

武装コンテナを兼ね備えた頭部

頭部がボディと一体化され、全周囲モノアイアルを備える。頭部には6連装のロケットランチャーや装備。ズゴックEでもこの構造は受け継がれる。



→ 武装

腕部に武装を集約

対潜用武器は頭部に備える一方、腕部にアイアン・ネイルとメガ粒子砲を装備した武装ユニットとなる。ズゴックEでは、よりミニチュレーター的なバイス・クロウへ発展。



→ ジェネレーター

ハイブリッド ジェネレーターを搭載

水冷・空冷併用のジェネレーターを採用し、達成性能が向上。冷却水の搭載量を減少したこと、機体の装備重量も軽減し、運動性の向上につながっている。



→ ランドセル

水中地帯対応の 推進ユニット

ランドセルは、熱核ジェット・熱核ロケットエンジン。水中での推進力だけではなく、地上での運動性にも貢献。ズゴックEでは、ユニット式のジェットパックも装備可能となった。



→ 脚部

柔軟な構造で陸戦に対応

脚部をフレキシブル構造とすることで、脚部の自由度は高い。こうした構造の要素もあり、ゴッグやアッガイよりも、陸戦への適応性は高かった。



ズゴック系の進化



U.C.0079
MSM-07B1
ゼゴック

モビルダイバーシステムの機動音速ユニット。

U.C.0079
MSM-07E
ズゴックE

アッガイシリーズとの連携を意識し、陸戦性能を重視。

U.C.0079
MSM-07E
ズゴックE

統合整備計画に則った改良を施され、熟成がはかられた。

U.C.0079
MSM-07
ズゴック

MJP社初のモビルスーツ。最後発であり、高い性能を示した。





モノアイ

アッカイと同じく全身
を見渡すことが可能。

アイアン・ネイル

生産型では3本。ゴ
ッグと同じく基部
まで一体型のため、
交換作業は煩雑。

・ボディ

モビルスーツの胴体に大きな
平たい頭が埋まっているような形
状をしている。頭頂部にはミ
サイル発射口を6基そなえる。

■ MSM-07

ズゴック

Spec

頭頂高：18.4m

本体重量：65.1t

全機重量：98.4t

ジェネレーター出力：2,480kW

スラスター総推力：83,000kg

装甲材質：チタン・セラミック複合材

武装：アイアン・ネイル×2

頭部6連装ミサイル砲

腕部メガ粒子砲×2

フリージャード

装甲材質

耐任性確保のため、当時のジ
オング公園製モビルスーツには
珍しくチタン・セラミック複合
材を使用。ガータンクの75m
mキャノンを擰てても耐えた
こともある。

脚部

脚部は脚部と同様フレキシ
ブル・ヘロウズ・リムを使用
している。貧弱の「脚」に近
く、陸上での機動性も良好。

MSM-07S
シャア専用
ズゴック

武装

主兵装は両腕に内蔵されたメガ粒子砲で、モビ
ルスーツの基甲も一撃で貫き、対艦、対モビル
スーツを還ばず活用された。アイアン・ネイル
はいかむような動作もできるが、ミニピュレー
タ一代わりというよりは3本のアイアン・ネイ
ルの先端に威力を集中させ、ゴックのようにひ
つかくだけではなく貫くような攻撃ができる。



・ジムの脚部ら
に貫通するほどの
度を持つアイアン・ネイル
船底などひどいたまりかない



・射撃部装備はメガ粒子砲の
ほか頭部ミサイル
ミサイル別属性が低
い所では発射不可



操縦機になつた訳は 水中と陸上の能力バランス

S型の先行量産型は、一瞬の隙を突いてジムの腹部をクローズで貫くほどの動きを見せた。また、ガンキャノンと組み合ったときはパワーワーに優位にいた。熱的に余裕があり機関を全力で稼動できる間は、陸上での戦闘能力も高い。



MSM-07ズゴックは、後発のMSM-04アツガイよりも開発が遅れ後の、ア番目の機体として完成した水陸両用モビルスーツである。モビルアーマーなどの機動兵器の開発を得意とするMIP社が担当した。

実際のところ、ズゴックは、ゴックと競合する形で同時に開発が始まつた。型式番号の数字が離れているのは、開発延滞によるためで、一説にはゴックの試験データを元に設計変更を行つたとも言われるが、大幅にというわけではないだろう。その理由は双方のスペックの差を見

れば明らかで、実に差が大きいからだ。ズゴックとゴックでは重量は本体重量で20トン、装備重量で80トン強もズゴックが軽い。陸上での両機の機動力には大きな差が出ている。反面、スターの推力はゴックの約70パーセント。この数値はズゴックがゴックに劣る数少ない部分である。

ジネレーター出力に関しては、ズゴックの方が約40パーセント高出力である。ズゴックもゴック同様メガ粒子砲を装備しているが、収束率はゴックより高く、装備場所も腕部に内蔵されているため、その自由度は高い。

そしてこのジネレーターは、ゴックと異なり水冷／空冷ハイブリッド式と呼ばれる冷却方式を採用していた。

その理由は双方のスペックの差を見

水（冷媒）の搭載量を減らし機体を軽量化すること、さらに冷却も液冷に頼らす、空冷状態での稼動も前提に設計することで、陸上での行動速度や作戦行動時間もゴックより高いだろう。

ボディ形状の違いがあるため簡単には結論付けられないが、海中の航行能力特に速力に関してはゴックが勝るだろう。水深に対する耐圧能力も、一般的なモビルスーツ体形に近いズゴックよりも優れていると見られる。

つまり、ズゴックは総合的に見てゴックより陸上での行動能力に重点を置いて開発されたモビルスーツといえる。そのため両機は競合機とはいえど、その開発コンセプトが違う機体と言えるのだ。いかに開発が遅れたとはいっても、ズゴックの実戦データを元にして、完全に再設計するほどの時間があったとは到底考えにくい。ズゴックは、軍から必要な性能のひとつである通商破壊をしつつ、より強襲戦闘の能力に重きを置いていたのである。反対にゴックは洋上・海中における能力重視型の機体といつていい。

水陸両用機としての主力の座は、結

果的にゴックではなくズゴックのものとなつた。実際の戦場で求められた状況に対し、ズゴックの方が近かつたから、という理由ではないだろうか。

『ジャブロー基地攻撃に
参戦。ガウズ空輸され
拠点として参加した機
である。

← 設定画はP105へ

主な配備地域

ジョン公国軍の主力水陸両用モビルスーツとして、キャリッフルニアベースをはじめとして世界各地の沿岸基地に配備されていた。実際にはユーコン級潜水艦などとともに、基地より遠く離れた海洋での行動を行っていたため、配備数は流動的で補給のため基地から基地といった状況だったとも考えられる。



Z'GOK EXPERIMENT

背部ジェットパック
これを装備した姿形こそズゴックに似ているが、ズゴックと異なり地上(空中)用の装備である。

装甲

装甲はチタン・セラミック
複合材でズゴックと同様。

アボシモーター

姿勢制御用のアボシモーターを新しく装備し、陸戦時の機動性アップに貢献している(ハイゴッグも同様)。

MSM-07E

ズゴックE

Spec

頭頂高: 18.4m

本体重量: 69.5t

全備重量: 311.0t

ジェネレーター出力: 2,570kW

スラスター総推力: 112,000kg

(20,000kg×4, 16,000kg×2)

装甲材質: チタン・セラミック複合材

武装: 魔術発射管×6、ビーム・キャノン×2

アイアン・ネイル×2

四肢の関節構造

フレキシブル・ペロウズ・
リムを使った手足の関節の
構造は変わらないが、リム
の数が増えより細かい動作
が可能となった。

増加装甲

肩や太腿の付け根に装甲が追
加され、陸戦時の防御能力は
向上

武装

腕部に内蔵したメガ粒子砲(ビーム・キャノン)
はエネルギーCAP技術の進歩により、連射能
力が高まった。ズゴックからの変更点として頭
部のミサイル発射基は魚雷に換装されているほ
か、アイアン・ネイル4本になるなど細かい仕
様変更がされているが、全般的には機体同様、
武装もキープコンセプトである。



ハイゴッグの本数
はハイゴッグと同様4本
だが配備はハイゴッグと
なる物を抱むことが可能



水中での能力を求める
ために、頭部ミサイルは魚雷に
替わった。発射基の数はこの
で変わらず。

ズゴックのコンセプトを 引継ぎ熟成させたモデル

MSM-07ズゴックは水陸両用機として有用な機体だったが、MSM-07 EズゴックE（エクスベリメント）はそのズゴックのコンセプトを引き継ぎつつ、完成度を高めた生モデルといえる。その際に総合整備計画をはさんでいるために、ハードウェア的には大きな変化をもつとも大きな部分は生産性に関するところだ。ズゴックはメガ粒子砲の出力が維持しやすい北極という特殊な環境であることを差し引いても、能力的には非常に高いことがわかる。



ジェネレーター出力や武装など、スペック的には重量以外は勝っている。少数のハイゴッグとの混成部隊で重要な機密を抱える連邦軍基地を襲撃することすら可能だった。外気温が低くズゴックE（およびハイゴッグ）の出力が維持しやすい北極という特殊な環境であることを差し引いても、能力的には非常に高いことがわかる。

もつとも大きな部分は生産性に関するところだ。ズゴックはメガ粒子砲の内蔵や、空冷式水冷をハイブリッドさせたジェネレーターを持ち、複雑で手間のかかる構造を持つていた。

また、ズゴックはモビルスーツの開発の経験が少ないM-IP社が開発したため、コクピットも一般的なモビルス

ーツにおける諸問題を解決するため遂行された計画だ。その基本骨子は各々のバーツの規格やコクピットおよび操縦系統といった、モビルスーツの構成要素単位において、できるだけ共通性、統一性を持たせて生産・管理の合理化ならびに効率化を図るという。ズゴックEの開発計画は、このように再設計された機体である。

具体的には、コクピットのコンボーネントが第2期生産型と呼ばれるタイプになってしまっている（これはハイゴッグも採用している）が大きなトピックだが、ズゴックの特徴的装備だった腹部のメガ粒子砲も、MS-14ゲルググ

の開発によって培われたエネルギーCAP技術がフィードバックされており、威力と連射性が向上している。

クローケーも基部から一体型になつて、戦闘で損耗する先端部分だけを換えやすい構造になつていて、また、総合整備計画の内容と離れた変更点としては、水中用推進器が背中から股間部と脚の裏に移設され、かわりに背中にはハイゴッグと共に用のジエットパックが装着できるようになった点が挙げられる。

さらに背中には陸上用（地上でジャンプなどに使う）のスラスターが4基内蔵され、姿勢制御用のバニアも増設されており、水中から陸上への強襲、揚陸用モビルスーツとしての機動力がアップされた形だ。

これらの変更点により、ズゴックEはズゴックより生産性やコストにすぐれ、なおかつ陸上で活動するモビルスーツとしての性能を向上した。

ズゴックEは、実質的にはズゴックに比べて大幅な改良をしたわけではなく、あくまで総合整備計画を導入するにあたって、使用実績を踏まえ適性化しただけの機体とも言えるだろう。

しかし言い換えれば、水陸両用モビルスーツとしてのズゴックが、最初から優秀な機体であったという証明でもあるのだ。

ハイゴッグとともに連邦軍の北極基地を襲撃をかけ、シャトル発射を阻止しようとした。

→ 設定画はP116へ

主な配備地域

ズゴックの後継モデルだけに、一定以上の規模の沿岸基地には全世界的に配備されていた。だが、生産されたのが一年戦争最後期なため、ジョン公国との地理における勢力圏は狭まってしまい、実質的な配備地域や配備数は多くはない。沿岸警備の他、北極では海中からの奇襲など機体特性を活かした使用方法がなされている。



■ MSM-07di

ゼーゴック

Spec

全長: 27.3m 本体重量: 212.0t

全備重量: 540.0~917.0t (装備により異なる)

ジェネレーター出力: 11,813kw

スラスター総推力: 285,000kg

装甲材質: チタン・セラミック複合材 武装: 腹部メガ粒子砲

大型ミサイル、ロケットランチャー、拡散ビーム砲ほか

ズゴックを兵装コントローラーとして使用
制御ユニットとして使用

ジャブローは、地球連邦軍の本部基地であるばかりでなく、一大生産拠点でもあった。ジャブローで製造された艦艇はそのまま宇宙に向けて打ち上げられ、新たな戦力となつた。ジオン公国軍としては、これら連邦軍宇宙艦隊の増強をどう阻止するかというの重要な問題であった。

モビルダイバー・システムは、これら

地球連邦軍宇宙艦艇を打ち上げられる寸前、あるいはその最中に破壊するべく開発された試作兵器であり、計9機

が製造されたといつ。そのコンセプトは、打ち上げ態勢にある敵に向かつて衛星軌道から急降下

右腕部

右腕は大型センサユニットに交換されてい。そのため実質的にズゴックの兵装として機能が残っているものは左腕メガ粒子砲のみ。



胴体

ズゴックの上半身と推進器(下半身)を接合した制御ユニットがゼーゴックであり、LWCを含めた機体全体はモビルダイバーシステムと呼ばれた。

武装

テストで使用された兵装は大型ミサイルを4基、28連装ロケット発射機4基、モビルアーマー用を転用したメガ粒子砲の3パターンで、LWCには基本的にどれか一つを搭載する。このうち実際に戦果を挙げたのはメガ粒子砲であったが、このような装備の駆動が可能であったのもズゴックであればこそであった。



→ 大型ミサイル、ロケット
弾ともにテストでは命中させることはできなかつた。



モビルアーマー用メガ粒子砲
子砲は強力だが意造品で、5秒以上の間隔は必要

し、奇襲を行った後にガウ攻撃を専門的な航空機で機体を回収するという、他に類を見ないものであった。

モビルダイバーシステムの構成は、LWCと呼ばれる大型の兵装コンテナと、コンテナに搭載した兵装を運用する制御ユニットに分けられ、LWCは戦闘終了後バージ、パイロットの乗る制御ユニットだけが回収されるというスタイルが採用された。

このLWCの制御ユニットには、水陸両用機であるゼゴックの上半身が改裝されて使用されており、ゼゴックと名づけられていた。

モビルダイバーシステムは水中に潜航するわけではなく、制御ユニットが水陸両用機である必要はない。にもかかわらずゼゴックが選ばれたのは、LWCの動作に必要な高出力のジェネ

レーターを持ついたためである。

さらに、宇宙空間から大気内へと環境の急激な変化に対して、その出力を維持する必要があり、この点においても空冷と水冷を併用するハイブリッド式冷却機構をもつゼゴックは適していた。また、ゼゴックは機体がチタン・セラミック複合材でできており、超硬スチール合金を使用した他のモビルスイッチより摩擦熱への耐性が優れていた。

モビルダイバーシステムは都合4回の試験が行われたものの、テストパイロットが失われたことや、主戦場が完全に宇宙へ移行したことなどから開発が中止された。また、絶対条件等も言える制空権の確保が困難になつたことも、おそらく理由の一つであろう。

モビルダイバーシステムとは、実際制御ユニットの「器」の重要性はそれほど高くはない。それでも、水中と陸上という過酷な環境に適応させた水陸両用機の特性を、存分に發揮した事は間違いないであろう。

VS連邦軍艦艇

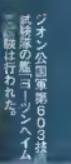
衛星軌道から降下し、打ち上げ中の艦艇と交差する形で攻撃を加えるという、非常に難度の高い方法で攻撃せねばならず。加えてジャブローの厳しい対空砲火にもさらされたため実際の戦闘は困難を極めパイロットへの負荷も大きい。しかしメガ粒子砲を使った試験時にはサラミス4隻、マゼラン1隻を一撃に撃沈している。



頭部
頭部ミサイル発射口の跡はあるが、機能としてはオミットされている。

LWC

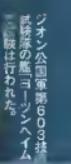
LWCとはLogistics Weapon Containerの頭文字をとったもの。ロケット砲やメガ粒子砲など様々な武装を選択し運用することができる。作戦終了後は切り離され(破壊され)回収後はゼゴックも「使い捨て」となる。



◆設定画はP122へ

主な配備地域

ゼゴックは試験機であり、正式に採用されることはなかったが、ジャブロー基地上空にて4度の試験を行つた。もし採用が決まっていれば月のグラナダの艦隊や、地球に近く新しい海域を巡回する艦隊に配備され、「連邦軍艦艇打ち上げ」の報が入り次第衛星軌道に赴き、降下・破壊任務にあつたと思われる。



ジョン公園軍第603機
モビルは行かれた
モビルは行かれた

ZOGOK

■ MSM-08

ゾゴック

Spec

頭頂高: 18.2m 本体重量: 77.4t
 全備重量: 107.3t
 ジェネレーター出力: 1,688kW
 スラスター総推力: 97,400kg
 装甲材質: チタン・セラミック複合材
 武装: 頭部ブーメラン・ミサイル×10
 腹部ワイドカッター
 アーム・パンチ×2



武装

左右のアーム・パンチがゾゴックの「主兵装」。クロ一に比べメンテナンス(バーツ交換)の頻度やコスト、作業性に利点もある。頭部のブーメラン・ミサイルやワイドカッターはかなり特殊な形状だが、ウェポンペイに格納されておらず被弾、誘導の危険もある。戦闘開始とともに早くに使い切る兵装と考えられる。



● ゾゴックのアイアン・ネイルの戦闘能力は高いが、ランニングコストも多い。



● ゾゴックのミサイルは、かなり西日本状態での発射時に有利。

vsズゴック

試作機といふこともあり、ゾゴックは戦闘を行った記録に乏しくどの程度の実力だったかは不明な点も多い。ベース機であるズゴックと比べた際には、格闘能力は互角以上。稼動時間ではゾゴックが優れる。しかし遠距離攻撃用の兵装がないため、ジュアックなどを伴わないので単機で戦闘を行うのは非常に危険である。数少ない実戦では宇宙世紀0088年にスタンパ所有の機体がΖガンダムと戦闘を行ったことがあるが、空中からの蹴り一発（大型のカメラ部分にヒットしてしまった）で行動不能となった。ゾゴックがオリジナルではない上に、機体の年代差がありすぎ、サンプルとしての適正に欠けるケースではある。

陸上用モビルスーツである。といつても陸上用モビルスーツある。といつても從来までの水陸両用モビルスーツとはまたたく間にゼットで制作された機体となっている。それは、地球連邦軍のジャブロー基地を攻略することを主眼とした揚陸後の格闘戦に特化した「ズゴック」である。つまり、具体的な使用法が明確に決められたものであると言つていい。

ゾゴックはズゴックをベースとしている機体ではあるが、水陸両用機の最大の特徴であるメガ粒子砲は装備しておらず、戦闘スタイルは打撃による格闘戦が、ブームラン・ミサイルやワイ

水中航行も可能な 陸上用モビルスーツ！？

ドカッターを使用した四回戦だ。

ジエネレーター出力は1686キロ

ワットとズゴックの7割程度だが、これでも一年戦争時のモビルスーツとしでは高水準である。むしろパワー的に

余裕が生まれ、陸上での（全周運動での）行動時間の延長などのメリットもある

だろう。しかし、重量は逆に増加して

いるため、機動性という意味では疑問

が残る。機体もズゴックをベースとはいうものの、腰周りを除いて大幅に変

更が加えられている。腕や脚はフレキシブル・ペロウズ・リムを使用してい

ないが、これも陸上を重視した結果、一般的な（陸上用）モビルスーツに近

い形となつたためだ。

武装は前述のとおり、主兵装はアーマム・パンチである。ミニピュレーター

を装備しており、水陸両用機に特徴的

なクローは持っていない。クローは

確かに強力だが、硬度や強度を考

えると高価なはずであるし、交換サイクルなど

不都合も多く、陸戦だけを考えるなら「拳骨」

の方が合理的な面もあるだろう。

なあ マニピュレーターといつても戦闘用マニピュレーターであり、指は動くものの細かい動作は不得手であるが、ひょっとしたらマシンガンやバズーカ程度は持つことは想定していたかもしれない。ブームラン・ミサイルやワイヤードカッターなどの武装も、その威力・有効射程とも特記するほどのこともない。

実際、グフが後にB3タイプで距離に対応したという例も見るまでもなく、モビルスーツの戦いは、稀に格闘戦はあるが、基本はアウトランジからの攻撃で決着がつくことが多い。そういう意味ではゾゴックは中途半端な機体と言つていい。ひょっとしたらジャブローが洞窟を利用していることから、必要以上に近接戦が多いと想定されていたのかもしれない。

ゾゴックは、アッガやジュアッガと部隊を組んで運用することを想定されている。ジュアッガによる砲撃支援を受けている。ゾゴックの320ミリロケットランチャーやによる砲撃支援を受けながら敵に肉薄し、アーム・パンチで殲滅していくというのが、アッガシリーズ+ゾゴックの基本的な戦術となる（アッガは戦闘的な戦闘力はない）。アッガガイドとは近接格闘用の機体といふ点で競合するが、重量などのスペックや武装、ベースとなった機体を考へると、より機動力や直接的な格闘戦を重視した機体がゾゴックと考えることができる。

◆ 設定画はP114へ

主な配備地域

ジャブロー攻撃を目的に計画された機体であるため、当然ジャブロー攻撃作戦に投入が前提だろう。しかし、洞窟内の戦闘にどう対応できるのかは未知数である。



→ ジャブロー攻略用モビルスーツでは入ったが足を踏み入れることはなかった。



→ ハロイのコクシングンの一牮木塔は不明たダメス



アッガイ系

水陸両用モビルスーツの基礎を築く

シオニック社によってスタートした水陸両用モビルスーツ開発。だが同社はアッガイの生産のみにとどまつた。はたしてその理由とは?

得られた基礎データを 3社で共用、発展させていく

ザクをはじめジオニック社はあらゆる状況において、モビルスーツ開発をリードしてきた。地球侵攻作戦に際しても、その苛酷な環境に対応するため、様々な局地専用機のトライアルを実施。その中で、地球上の大部分を占める海への対応も迫られるに至る。

他の局地戦対応機と同様、やはりipesとされたのはザクであった。当初からどの程度ザクの水中対応に期待がかけられていたかは不明だが、開発の途中で早くもザク・マリンタイプの熟成は見送られ、データ収集用としての側面が強くなる。そしてツイーリット、M-1P、ジオニックの3社による異なるコンセプトの水陸両用モビルスーツ

開発にシフトした。

その後の歴史を振り返れば、ジオニック社は多数のプロジェクト（根幹技術の開発や次期主力機ゲルググの開発）を抱えており、開発に要するカロリーの分散を危惧していたのかもしれない。ジオニック社以外の両社が、ハイパフォーマンスのズゴック、コッグを開発したのに対し、ジオニック社が水陸両用機ではアッガイ系の開発のみに終わった点も、そうした状況が影響していると考えられる。

3社同時開発は決して競合ではなく、明確な役割分担が持たれていたことには、各機の特性からも理解できる。ジオニック社が担当したアッガイは、高い性能よりも「信頼性のある技術」を使用するよりも「実用性、信頼性、生産性を兼ね備えた機体を作ること」にあ

「たはすたアーラーは名前が美しい

つた機体だつたの」ある。
すでに生産さそまるザクの、
ユアフグやアッグガイといったアッゲ
リーズなどの、特務機の開発も比較的
した設計は機体の改良を容易にし、シ
ユアフグやアッグガイといったアッゲ
リーズなどの、特務機の開発も比較的
な武裝……。こうして中止された開発
した設計は機体の改良を容易にし、シ
ユアフグやアッグガイといったアッゲ
リーズなどの、特務機の開発も比較的
的時間で行えたと考えられる。

ハイパフォーマンス機の開発に人の
コストは避けないが、生産力ではジオ
ニック社は最大手である。そこがアッ
ガイ系の位置づけだった。水陸両用モ
ビルスーツの開発は決して各社が独自
に進めたのではなく、ジオンといつも
が一体となり、それぞれの特性をよく
理解したうえで進められたプロジェクト
といえるのだ。

■ クローズアップポイント ■

→ クヒット



複座式を採用する

クヒットは複座式といわれる。特に役割を分担しているのではなく、単純にスペースを活用したと考えられる。ズゴッグ同様、レールで昇降することが可能である。

→ 頭部

巨大な頭部はバластタンク?

上方と全周面をカバーするモノアイレベルは、首の可動範囲を補い、水中戦に対応した構造。巨大な頭部は水冷用バластタンクの可能性も。武装として4連バルカンを備える。



→ 武装

各種兵器を両腕に分散

左腕にアイアン・ネイル+メガ粒子砲、右腕に6連装ミサイル・ランチャーという組み合わせが一般的。だが、両腕をランチャー（アイアン・ネイル）などに変更も可能。



→ 腕部

アタッチメント式で変更可能

両腕はアタッチメント式の武装ユニットと考えられている。アッガイやジュアッグでも腕部の換装が可能であり、アッガイの構造が引き継がれている。



→ ジェネレーター

ザクのものを流用したツインジェネレーター

ザクのジェネレーターを2基搭載し、高出力化を狙う。さらに氷冷化することで、ジェネレーター冷却に対応。排熱が抑えられたことで遮密性が向上した股も。



→ 脚部

系列機はフレキシブル構造に発展

オーソドックスな関節構造を採用するが、関節部にはシーリングが施される。陸戦を重視した系列のアッガイシリーズは、フレキシブル構造を採用している。



■ ザク～アッガイ系の進化 ■



U.C.0079

MSM-04N

アッガイ

ジャブロー攻撃用のアッガイの特務機。格闘型。



U.C.0079

MSM-04G

ジュアッグ

ジャブロー攻撃用のアッガイの特務機。砲撃型。

U.C.0079

MSN-04

アッガイ

ザクのバークを利用した低コストの氷冷用機。

U.C.0088

RMS-192M

ザク・マリン

連邦軍によるザク・マリンタイプの再設計機。

U.C.0079

MS-06M

ザク・マリンタイプ

MS-06ザクIIを水陸用にしたマリン・ハイザック。



Spec

頭頂高：19.2m
本体重量：81.6t
全輪重量：129.0t
ジェネレーター出力：1,870kW
スラスター総推力：109,600kg
装甲材質：超硬スチール合金
武装：頭部パラストン砲×4

左腕6連装ミサイルランチャー
右腕メガ粒子砲
アイアン・ネイル

コクピットは複座式

訓練用や兵員輸送などの説明がある。ザクのジェネレーターを2基搭載したことから、結果として機体サイズは大型化したこと、コクピット内に余剰スペースが生まれたのだろう。

武装換装を可能にした腕部

他の水陸両用機と同様、フレキシブル・ペロウズ・リムという伸縮式多連装銃構造を採用。先端部に武装ユニット化されており、換装が可能だったと考えられる。

武装

ズゴックと同様、両腕に武装が集中するアッガイ。だがズゴックがアイアン・ネイル+ビームを両腕に装備していたのと異なり、右腕にアイアン・ネイル+射撃武器、左腕にミサイルランチャーと分散させ、さらに用途に合わせて換装を行ったと考えられる。すべての武装をフォローアップするよりも、コスト面で有利であった。



両腕をローラー式トランジットとしての役割を担っていた?



本体重量の7割を占める
フロント攻撃。既存兵器
圧倒的威力を発揮した



ズゴックと行動を共にする 同コンセプトの廉価版

ジオン公国軍の地球侵攻に際して開発が進められていたゴッグとズゴック。本来はこの2タイプでジオンの水陸両用機の構想は貽えたと考えられるが、突出した性能をもつ水陸両用機は、高コストを誘発し、大量生産には不向きとの回答が出された。

そのため、より現実的な生産モデルとして導き出されたのがアッガイである。一聴にゴッグ、ズゴックよりも後に開発された機体といわれるが、こうした要素は設計段階ですでにジオン側としては理解していたと考えられる。なぜハイローミックス思想のローリーな位置づけとして、平行してアッガイの開発が進められていたと考えられる。

陸上での運動性能が高いとはいえるが、相手がガンダムとなれば圧倒的に不利である。シャアはその不利を見抜いていたのか、戦闘を行はずに真っ先に撤退を告げている。だがその命令もむなしく、追撃するガンダムに蹂躪される結果となった。



アッガイは、水上よりも地上での作戦行動が重視されており、機体構造（両腕に武装を持つ、モノアイレールが360度をカバーする）等、ズゴックに近い。それゆえ、ズゴック、アッガイでハイローミックスを構築しようとしていたとも考えられる。

ハイエンド機であるゴッグ、ズゴックがツイーマント社、M-1P社の開発に対し、アッガイはよりモビルスーツ開発に熟練し、生産能力や開発スピードが高いと考えられるジオニック社開発である。しかし、機体のコンセプトがよみとれる。すなわち、高性能が多数のゴッグ、ズゴックに求められた要素とは相反する。それが量産性を当初から求められていたのである。

たとえばジエネレ

後発の機体ながら MSM・04 という若い式番号がつけられているのも、そのためだ。アッガイは「水陸両用」の、アッガイのコンセプトは、よりズゴックに近いものとなつた。ゴッグが通商破壊や上陸作戦の橋頭堡を作る役割を中心としていたことに対し、アッガイは水中よりも地上での作戦行動が重視されており、機体構造（両腕に武装を持つ、モノアイレールが360度をカバーする）等、ズゴックに近い。それゆえ、ズゴック、アッガイでハイローミックスを構築しようとしていたとも考えられる。

ハイエンド機であるゴッグ、ズゴックがツイーマント社、M-1P社の開発に對し、アッガイはよりモビルスーツ開発に熟練し、生産能力や開発スピードが高いと考えられるジオニック社開発である。しかし、機体のコンセプトがよみとれる。すなわち、高性能が多数のゴッグ、ズゴックに求められた要素とは相反する。このように大量生産を目的としたアッガイだったが、ジオン公国軍が地球から撤退を開始したことで、わずか60機の生産のみにとどまつたといつ。

ターレーには、ザクと同タイプのものを2基搭載するという画期的な設計が導かれた。開発費を抑えとともに、高出力化を実現している。このジエネレーターは、水中用対応として水冷化が行われたが、その変遷によって熱排出量が抑えられるという恩恵も得た。その要素を隠密偵察用として活かすため、装甲や塗装にステルス性を高める措置が取られたというが、ザブローでの潜入作戦用にいたたむえに「隠密性が高い」という説が広がったとも考えられ、真偽は定かではない。

一方、武装面でもアッガイの徹底したコストダウン思想が見て取れる。右腕にはアイアン・ネイル+射撃武器、左腕には6連装ミサイルランチャを搭載されるが、右腕にはピーム兵器を搭載するタイプもあった。つまり、アッガイの両腕部は武装ユニット化されており、局面に応じて胸部武装を換装できた可能性も考えられる。

設定画はP106へ

主な配備地域

水陸両用モビルスーツの中でも、生産数が比較的多いアッガイは、ザブロー潜入作戦で用いられた機体以外に、東南アジア戦線でも確認されている。沿岸地域や湿地帯などの激戦区に、優先的に配備されていた可能性が考えられる。



◆ザブロー潜入用に用いられたモデル。姿は様々なタイプに改造されていた。
東南アジアに配備された機体。細部が異なるマイナーチェンジ版の可能性も。
このように大量生産を目的としたアッガイだったが、ジオン公国軍が地球から撤退を開始したことで、わずか60機の生産のみにとどまつたといつ。



複眼式モノアイ

複眼式モノアイを採用。通常のモノアイよりも、センサー類が強化されているというが、性能は定かではない。なお、まったく異なる兵器だが、この複眼はザクレロにも採用されている。

MSM-04N

アッグガイ

Spec

頭頂高：19.0m 本体重量：113.7t

全備重量：171.6t

ジェネレーター出力：2,010kW

スラスター総推力：109,000kg

装甲材質：超硬スチール合金

武装：頭部/バルカン砲×2

腕部ヒート・ロッド×4

陸戦に特化した脚部

脚部はアノガイをベースとしつつも、変更が行われている。膝はフレキシブル・ペロウズ・リムのような構造となっており、陸戦性能を高めるために変更された可能性も。

4連のヒート・ロッド

アッグガイのメイン武器。グフよりも大幅にジェネレーター出力が高いこともあり、4連のヒート・ロッドを同時に使用することが可能だったのだろう。

武装

脚部を武装ユニット化したアッグガイの構造を受け継ぐ。そのため、基本武装である4連のヒート・ロッドのほか、アイアン・ネイルへの換装も可能であった。ジュアッグのバックアップがあるため、射撃武器は装備されていないが、アッグガイのロケットランチャーなどへ換装することも可能だっただろう。



● 戦闘を終えた後、ソゴーリングが武装を外す。どう運用も想定されていなかった可能性もある。



● 本体はなんらしく、に打ち付けて行動不能にさせられる。



ジャブロー一攻略用の 試作モビルスーツ

天然の大空洞を利用した地球連邦軍の本部ジャブロー。この難攻不落の拠点を攻略する目的で開発されたアッゲンシリーズ計画の1機が、アッゲガイである。このプロジェクトは、掘削用として侵攻ルートを確保するアッゲ、後方援護用のジュニアッゲ、そして近接戦闘用として、ゾゴック、アッゲガイと、いづれも想定されていた。

型式からもわかるように、そのべークとなりたのは MSM-04 アッゲガイであった。これはもともとアッゲガイはザクのハーツを流用している面もあり、様々な設計変更等を受け入れる余地があった。これはもともとアッゲガイはザクのハーツを流用している面もあり、様々な設計変更等を受け入れる余地があった。これはもともとアッゲガイはザクのハーツを流用している面もあり、様々な設計変更等を受け入れる余地があった。これはもともとアッゲガイはザクのハーツを流用している面もあり、様々な設計変更等を受け入れる余地があ

想定にあったジャブローでは使用されなかつたが、タイガーバウムで展示品として保存されていた機体で実戦が行われた。だが相手は最新式のZガンダムであり、まったく通用しなかつた。また巨大な複眼をバズーカで狙われるという状況も見られた。



他にも陸戦性能が高い点も、ジャブローは陸戦用として開発された。そのため、水陸両用の機能はもたされなかつた。アッゲガイは陸戦に特化した改築がなされた。

水陸両用モビルスーツは、ザクやゾゴックなども想定されていた。これらが想定されると、ジエネレーター出力やビーム兵器を使用できる点など、純粋に性能面で優れる。こうした特徴を利用として陸戦型として開発する、という考え方が導きだされたとしても決して不思議ではない。ゾゴックもそうであつたように、水陸両用から陸戦用への設計変更は、この時期のジオン軍で模索された案の一つだつたのだろう。

アッゲガイを特異なシリアルエットとしている要素として、頭部形状がある。ボディなどの根幹部はほぼアッゲガイを流用するものの、頭部は上方や後方を

フォローする全視界型ではなく、前部にセンサーを集中する複眼型を採用。

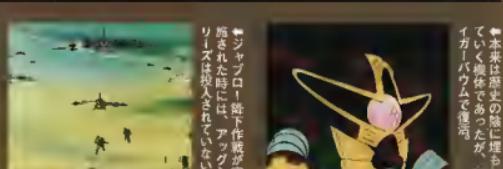
これはアッゲンシリーズとの連携運用を基本としていたため、近接戦闘に主眼を置いていたためであるといえるのだ。

一方、他の特徴としては腕部の4つの中のヒート・ロッドが挙げられる。これは陸戦用としてある程度の成果を残したグフからの転用であり、ザク2基分のジエネレーター出力を確保したことから、同時に複数の使用が可能となつた。

ここでビーム兵器が装備されなかつたのは、補給のままならない連邦本部において長期間の戦闘を強いられることや、陸上での作戦行動中の排熱の問題が発生することが予想されるため、使用に不安定な状況になりかねないビーム兵器よりも、グフで実績のあるヒート・ロッドのほうが信頼できる兵器と考えられたためだ。

また、アッゲガイシリーズは腕部を換装することが可能であったと考えられる。その設計はアッゲガイにも継承されている。基本武装であるヒート・ロッド以外に、ゾゴックのバズーカを転用したような3本爪のアイアン・ネイル装備型への換装が可能であった。

アッゲンシリーズはベーパーブランで終つたと考えられていたが、一年戦争から8年後、タイガーバウムを統治していたスタンバ・ハローのもので2機のアッゲガイが確認されている。



そもそもジャブロー一攻略用の機体であり、ジャブロー以外での運用は想定されていなかつた。そこで実績を挙げれば、水陸両用→陸戦用へ転換したモビルスーツのバイオニアとなつた可能性もあるだろう。一方、タイガーバウムに保存されていたのはスタンバ・ハローの趣味で、基本的には展示用である。

■ MSM-04G

ジュアッグ

Spec

頭頂高: 17.4m
 本体重量: 137.3t
 全機重量: 198.7t
 ジェネレーター出力: 2,660kW
 スラスター総推力: 97,900kg
 武装: 腕部3連装ロケット・ランチャー×2

320mm 3連装ロケット・ランチャー

320mmという大口径の実体弾を3連装で備える。1門あたりでもザク・バズーカより大口径であり、その遠方もない火力がうかがえる。

大幅に変更された脚部

脚部の大部分をフレキシブル・ペロウズ・リムで構成。アッガイと同様、離戦性能を高めるために取り入れられたのかもしれない。

武装

武装は支援目的に特化しており、320mm 3連装ロケットランチャーのみ。アッガイにあつた頭部バルカンなども排除されている。一方、アッガイと同様、武装はユニット化されており、他の武装に換装できる。アタッチメントが共通ならば、アッガイのようになイアン・ネイルも装備可能だったかもしれない。



320mm 3連装ロケットランチャーを一齐発射。水陸両用機でもトップクラスの火力。



ユニット式の頭をソクのマニピュレータ―持つモデル。



ゾックの廉価版として開発された!?

ジャブロー攻略を目的に開発されたアッガシリーズの1機。チーム単位で活動することを基本とし、アッガガイゾゴックの砲撃支援目的のために開発された。

ベースとなつたのはアッガイであり、これもジュアッグと同様、機体数や設計変更を許容する構造から導きだされたと考へられる。

特務機といえるジャブロー攻略用の機体の例にもれず、ジュアッグも両面に320ミリ連装ロケットランチャードを備えるなど、特異なシルエットを持つ。それゆえアッガガイよりも攻撃性は多岐にわたつており、特に砲撃戦型ということでは「ゴッグ」などの強度をもたせられているという。アッガは

近いコンセプトを持つツイッカーアップ。ジャブローコロナ目的に機能が特化した部分もあると考えられ、もしツイッカーアップに運用の幅を持たせるのなら、他の武器の搭載や全身周囲モノアイレールの採用といった措置が施されたかもしれない。



イ系のシルエットを残しつつも、細部にまで変更が加えられている。なお脇部はユニット式となつておらず、ジゴックのミニビューテーを装備する。これが、この機体の特徴である。この点は、アッガイの系譜を見ると取れる。象の鼻のような特徴的なノーズ部は、特に機能について明かされていないものの、おそらく冷却ユニットではないかと考えられる。他の機体と同様、ジニアックも水陸両用機をベースとしながらも、ジャブロー内での活動を意識した陸戦メインの機体。高荷重にさらなる冷却ユニットが追加されても不思議ではない。

そもそも計画のみに終わった機体であるため、解説されていない機能が多い。本体前面部にある、4つの開口部が何の機能をもたらしているかは明らかに

はなつていい。様々な説があるが、
転倒時に機体を起すためのスラスター
、もしくは水中用ハイドロジェット
エンジンの噴出口」という説が有力だ。
構造面からみると、ジユアッブは特異
な機体のよう捉えらるがちだが、実
はアッブシリーズは、振り返ってみると
との機体も理にかなったコノセプト
のもとに作られている。ジユアッブも
その例にもれず、「水陸両用モビルスー
ツの支援機」という位置づけはゾンク
が存在しておらず、ジョン軍にとつては
決して珍しいコンセプトではなかった。
アッブシリーズという枠組みから外
れた見方をすれば、ゾックとジユアッブ
とは、いわばスゴックとアッガイの間
係性に近いといえる。機体全体的に高
価となるメガ粒子砲を実績のある実体
弾に置き換へ、安価で信頼性の高い機
体をベースとする。同目的の廉価版
をジオーネック社が担当するという関
係性が確定されており、ゾックの廉
価版としてジユアッブが開発され
たと考えれば分かり易い。

→ 設定画はP113へ

主客配備地域

他のアッグシリーズと同じく、ジャブローでの運用に特化させた機体であるため、他エリアでの運用は考慮されていなかったかもしれない。また実際にアッグシリーズでの攻略作戦は中止されており、戦場に投入されたかは定かではない。



●ゾックのようだ、ジャッキー。
ローラー攻撃を後方支援するモー
レンも見られたのだろう。

Z A K Marine Type

ハイドロジェット
エンジンを搭載
水陸での運用のため
ランセルはハイ
ドロジェットエン
ジンへと換装、舵の
後部を柔軟なフイン
を備える。ここで審
査されたデータが、
その後の水陸両用機
に引き継がれてい
ることになる。

■ MS-06M (MSM-01)

ザク・ マリンタイプ (マリン・ハイザック)

Spec

頭頂高: 17.5m
本体重量: 43.3t
全備重量: 60.8t
ジェネレーター出力: 951kW
ハイドロジェット総推力: 66,000kg
センサー有効半径: 3,200m
装甲材質: 超硬スチール合金
武装: 240mm 4連装ロケットポッド
サブロック・ガン
60mmバルカン

各関節の
シーリング処理
各部の関節は防水用
にシーリング処理が
施され、可動部への
水の浸入を防ぐ。ま
た関節以外にも、あ
らゆるパートで水の
進入を防ぐ措置が取
られている。

補助推進
ユニットを増設
両腕の先端部と脚部
後方に補助推進ユニ
ットを装備。結果と
して四肢を動かすこ
とで、AMBACのよ
うな繊かな方向転換
を行うことが可能と
なった。

武装

ジェネレーター出力と水中での運用を考慮し、
武装は実弾兵器を中心であった。メイン武装
としてはM6-G240mmロケットを搭載したサ
ブロック・ガン、オプションとしてブラウニ
ーM 8タイプ240mm4連装ロケット・ポッ
ドを両胸に搭載することも可能である。対潜
用としては十分な武装であった。



■ 基本的に同機体であるマ
リン・ハイザックに武装
は引き継がれている。



■ 水陸両用の武装と考えられ
るが、戦後ではモビル
アーマーにも用いられる。

海洋への対応のため 大改修を施される

一年戦争終結から7年後、ニューホンコンにおいて、マリン・ハイザックとガンダムMk-IIとの戦闘が確認されている。マリン・ハイザックは有利な海という状況に加え、4機ばかりで攻撃を行ったが、最新機との性能差は歴然としている。



他のザクバリエーション同様、变成了MS-06FザクII-F型。変更点はハイドロジェットエンジンの搭載、頭部・脚部の補助推進ユニットの増設、後部に浮沈用のラバースタンクの搭載。水密コクピットへの変更などを中心に行われた。

当初、基本構造はF型を踏襲していたが、開発の途中段階から北大西洋潜水部隊への配備が想定され、水深40メートルの深度での運用に耐えうる耐圧設計が要求された。また、宇宙用と水中用に求められる機密性の違いに直面し、最終的には大部分がM型専用バージョンとして新造されることになる。

初期に生産された機はI型と呼ばれ、ハイドロジェットエンジンと水中用武装のテストのため、北大西洋の潜水艦隊ソーサーベントに配備が行われ、実験が開始された。

I型の開発はそこで停止したわけではなく、各関節に防水用シーリングを施し、モノアイにも保護用の大型モニター・シールドを加えたII型がロールアウト。だが、それと前後して「ザクの水中運用」を行うプロジェクトは中止の臺き目にあい、水中用モビルスーツを開発するプロジェクトが優先されることになる。

その影響か、II型は2機のみの生産へと近代化改修が行われ、増産された。

◆ 設定画はP111へ

■ 主な配備地域 ■

北大西洋のソーバーベントに配備されたのち、各部隊へ分散。最終的には地中海侵攻上陸作戦へと投入されたという。戦後は連邦軍に接収され、改修されたのち、主に沿岸地域への警備に回されている。



シーサーベント

↑北大西洋で活動する潜水艦部隊（主にゴッグ配備）。



グリーンサイレン

↑北大西洋で活動する潜水艦部隊（主にスゴック配備）。



ナガ

↑太平洋で活動する潜水艦部隊。



にとどまり、I型と合わせてM型は、合計7機が生産されたのみに終わった。

そもそも「ザクの水中用運用」というコンセプト自体、当初から現実的な威力として考えられていたかは定かでない。むしろ水中実験やデータ収集といった面で比重が大きかつた可能性もあり、その後の水陸両用モビルスーツの完成度の高さからも、M型の果たした役割がうかがえる。

M型の開発はジオニック社の主導で行われたが、ソーバーベント隊での実戦で蓄積された各種実験データは、ソーバーベント社・MIP社の両社に送られ、ゴッグ、ズゴックの開発に大きな役割を果たしている。本来はライバルとなるはずの開発各社の協力関係は、ジオニックの置かれている特殊な状況をよく表しているだろう。

その後、7機のM型は特殊兵装のテストのため、レッドドルフィン隊（2機）、シーサーベント（2機）、グリーンサイレン（1機）、ナガ（1機）、マントレ（1機）へそれぞれ配備されることになった。すべての実験計画の完了とともに、戦線から離れていたが、一年戦争末期に実戦へと投入され、最終的には2～3機の機体を残して撃破されたという。

戦後、地球連邦軍に接収され、リニア・シートを搭載したマリン・ハイザックへと近代化改修が行われ、増産された。

水中用に改良された...
王アイレル
王アイレルは上方や
前方まで延長され、水中
用を意識した改良がおこ
なわれた。

■ RMS-192M

ザク・
マリナー

Spec

頭頂高：17.5m

本体重量：48.8t

全備重量：68.3t

ジェネレーター出力：1,440kW

ハイドロジェット総推力：8,800kg

センサー有効半径：4,600m

装甲材質：チタン合金

一部ガンダリウムを採用

武装：サブロック・ガン、他

...肩部サブロック

ザクタイプの機体の多くが、格闘用のショルダーアーマーを備えることに対し、ザク・マリナーではサブロック×3を搭載。いわばザク・マリンタイプの4連装ロケット・ポッドを肩部に移設したイメージである。

...着脱式ハイドロ
ジェットエンジン

水中航行用のユニット。宇宙世紀0080年代らしい近代的な構成となる。ザク・マリンタイプと異なり、パイロットの任意で着脱が可能となっている。また武装のサブロックを搭載している。

<.....サブ推進ユニットを増設

ザク・マリンタイプが後部にサブ推進ユニットを備えていたが、マリナーでは前面にも着脱式推進ユニットが増設されている。このほか腕部のハーケンユニットも着脱式であるなど、本機のコセプトが垣間見える。

武装

武装は基本的にザク・マリンタイプと同系統で、水中戦を意識したロケット弾が中心となる。メイン武器はサブロック・ガン。さらに両肩と背面の推進ユニットに、サブロックを搭載する。腕にはマグネット・ハーケンを備えるが、これは武装というよりは機体を海中で固定する際や、曳航用として使用される。



4連装のサブロック・ガン
基本的にはザク・マリンタ
イプと同構造である。



肩部には第一世代の
サブロックユニットを搭載
している。

vs ZZガンダム

ダカールを占拠したアクシズ勢は、アフリカ沿岸に駐留。接收されたザク・マリナーはさっそく水陸両用部隊に組み込まれた。だがアーヴィングのZZガンダムと遭遇すると、最新鋭との差は水中でも埋めることはできず、全機撃破されてしまう。



ザク・マリンタイプから 発展した運用法

一年戦争後、地球連邦軍はジオン公国軍が残したMS-06Mザク・マリンタイプを接收したこと、水陸両用モ

ビルスのノウハウをある程度獲得することに成功した。手始めに開発されたマリン・ハイザックは、基本設計がマリンタイプに準ずるものであり、モビルスーツ開発の漫遊期であるグリ

ビルス戦らしい機体であるといえた。ジオン公国軍ではあくまで水陸両用モビルスーツの試作機として使命を終えたM型であつたが、戦後、連邦軍では引き続き開発を継続。ジャブロー工廠にてザク系水陸両用機の集成成、ザク・マリナーが誕生した。

後の記録に再設計機と記述されているように、そのシルエットはM型とは異なり、どちらかといえばベースととなつたF型ザクに近い。構造部材にガンダリウム合金が記述されているのは、コクピットの剛性を高めるために採用されたという説がある。特徴的なのは、背部のハイドロジェットエンジン、脚部前面に増設されたサブ推進エンジンを着脱式としたことだ。また、胸部に曳航用のマグネット・ハーベンが装備されているが、こちらも着脱式となつていて、これらのユニークなものを排除した姿は、MS-06ザクそのものであり、異なつてはいるからなのかも知れない。M型は最大活動深度400メートルを

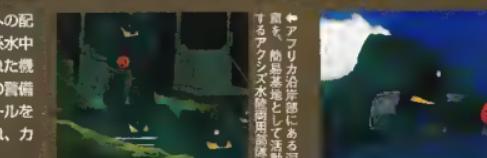
目指した耐圧性能が持たされている。だがザク・マリナーでは、前述のバルブのユニット化をはじめ、関節のシリング処理がされていないなど、浅い海域で活動するための仕様である。

これには、マリン・ハイザックの運用実績が影響しているのかもしれない。グリップス戦役当時、地球上でもカラバなどの反政府組織が活動していたが、基本的に連邦軍内の抗争でもある。そうした組織が潜水艦戦力や、絶対的な機体数が少ない水陸両用モビルスーツを運用する必然性はない。ゆえに連

邦側の注意は、航空部隊に分り分けられることになり、水陸両用機の配備工リアも、沿岸部が中心となつたはずだ。いわばザク・マリナーは、時代に適応した水陸両用モビルスーツであるた

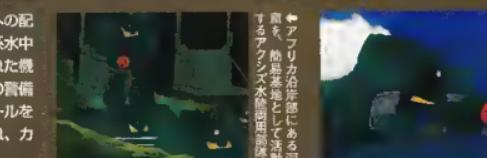
ろう。M型をベースとした背景も、おそらくスコックやゴッギでは投資コストの割に過剰性能で、この時代の海の守りは、ザクで十分だったのだ。

アフリカ沿岸地に配備されたザク・マリナーは、始島基地として活動するアクシズ水陸両用部隊。



主な配備地域

マリン・ハイザックから、沿岸地域への配備が基本になったと考えられるザク系水中用モビルスーツ。アクシズに接收された機体も、おそらく沿岸にあるダカールの警備用として配備されていたもの。ダカールを占拠したジオン軍残党に組み込まれ、カブルーとともに運用された。



■ EMS-05

アッグ

Spec

頭頂高: 15.8m 本体重量: 69.4t

武装: 大型ドリル×2

レーザートーチ

4連装ミサイル

ボッド×2~3

ベースは資源衛星
開発用の
作業用ボッドか?

ジャブロー一攻略用の
試作モビルスーツとして
開発された4機の中で、ひときわ異質な存在
であるアッグ。他の3
機種がアッガイやズ
ゴックといった既存
のモデルをベースと
しているのに対し、ア
ッグのみはベースモデ
ルが不鮮明である。水
陸両用としての機能はな
く、移動もボーダクラフト
を用いて水上を移動する。
機体の構成も、歩行を無視し
たような脚部、汎用性を考慮して



堅い岩盤をくりぬく大型ドリル
両腕部に装備された
ドリル。基本的にア
ッグは資源開発用
と考えられ、堅い土
壠のみに対応した作
業用機械である。腕
部はユニーク化され
ている。

武装

アッグの固定武装である大型掘削用ドリル、
肩部カッター、レーザートーチはあくまで作
業用であるため、基本的に戦闘用の武器は一
切装備していない。アッグ武装型では、ロケ
ットランチャーを装備しているものの、これ
らも急場しのぎにすぎず、モビルスーツに対
抗できた可能性は低いと考えられる。



ロケットランチャーを装備したア
ッグ武装型。胸部はユニットごと交換が
可能。足裏にはボーダクラフトユニッ
トを備える。



コックをはじめ
など、な



作業用を転用したボール

作業用を転用する、という意味では地球連邦軍のボールも前例といえるかもしれない。もっともボールは戦闘用であるため、アッグとは状況が異なっている。だが他の目的の機械を有効に活用するという考え方方は、宇宙世纪にも浸透していたのだろう。



のドリル、肩部の
アッガは基本的
には作業用である
ため、武装は装備
されていない。腕
部には大型掘削用

いないドリル式の腕部など、モビルス
ーツという兵器が人型を基本とするな
らば、アッグはそのカーテゴリーにも属
していないのかもしれない。はたして
アッグは、ジオン公国軍のモビルス
ーツ体系の中において、どのような存在
なのだろうか。

ヒントとなるのは、掘削を目的として
いた作業用MSである点だ。アッグがジ
ャブロー攻略作戦で担当はずつた役
割は、堅い岩盤に守られたジャブロー
基地の外壁を掘り進み、侵攻ルートを
作ることにあつたという。

こうした掘削能力は、実は宇宙でも
必要とされていた。それは資源衛星の
掘削作業だ。コロニー開拓時代、多く
の資源衛星がアステロイドから地球圏
に運ばれてきた。モビルスーツの原型
となる作業用機体は、すでにコロニー
開拓用として一般的な存在であり、こ

の資源衛星の開拓にアッグの原型
となつた作業用機械が投入されていた
としても不思議ではない。

うした資源衛星の開拓にアッグの原型
星を開拓するための作業用機械だつた
のではないかだろうか。

ジオン公国にはソロモン、アバオア・
クーという資源衛星を用いた要塞があ
り、アッグの源流は、こうした資源衛

星を開拓するための作業用機械だつた
のではないかだろうか。

一方、頭部にミサイル・ランチャー
を装備し、左腕のドリルもミサイル・
ランチャーに変更したアッグ武装型と
いうプランも存在したが、もともと作
業用であるため、戦力としてはほどど
ん期待されていなかつただろう。おそ
らく腕部の換装システムは、様々な作
業用ユニットに変更することを目的と
していたのではないかだろうか。

いずれにせよ、アッグシリーズを使
用したジャブロー攻略作戦は実施され
ることではなく、アッグ自体が生産され
たかも知れない。

だが、もしアッグのベースとなつた
のが資源衛星の掘削に実績のあるモビ
ルスーツであったならば、その作戦は
決して荒唐無稽なものではなかつたは
ずだ。

用としてホバーを
採用したのも、苦
肉の策だったので
はないだろうか。

アッグは基本的
には作業用である
ため、武装は装備
されていない。腕
部には大型掘削用

の腕部を想像
も、宇宙用を想
用として一貫して
採用したのも、苦
肉の策だったの
ではないだろうか。

カッターは掘削用であり、モノアイの
下部に装備されるのも作業用のレーザ
ー・トーチである。

一方、頭部にミサイル・ランチャー
を装備し、左腕のドリルもミサイル・
ランチャーに変更したアッグ武装型と
いうプランも存在したが、もともと作
業用であるため、戦力としてはほどど
ん期待されていなかつただろう。おそ
らく腕部の換装システムは、様々な作
業用ユニットに変更することを目的と
していたのではないかだろうか。

いずれにせよ、アッグシリーズを使
用したジャブロー攻略作戦は実施され
ることなく、アッグ自体が生産され
たかも知れない。

いないドリル式の腕部など、モビルス
ーツという兵器が人型を基本とするな
らば、アッグはそのカーテゴリーにも属
していないのかもしれない。はたして
アッグは、ジオン公国軍のモビルス
ーツ体系の中において、どのような存在
なのだろうか。

掘削用の大型カッター

肩部のカッターは切削用。
ボディの半分以上を占めるほどの巨大なカッターで、全体を使って掘り進んでいったのではないのか。



移動用のホバーユニット

脚部は簡略化され、1脚につき3個のファンと、2基のバーナープライアが装備される。構造的に見ても、歩くことはできなかつたと考えられる。



→ジャブローの入手口へ
こうした場所から侵攻ルートを確保するにはどうか。

◆ 設定画はP114へ

主な配備地域

他のアッグシリーズと同様、ジャブロー攻略のために考案された機体であるため、運用されたのであればジャブロー以外には考案されない。だが實際には計画自体が中止となつたため、開拓自体が行われなかつた可能性も高い。特にアッグは作業用であるため、実戦に投入される可能性も低い。

■ MSM-10

ゾック

Spec

頭頂高: 23.9m

本体重量: 167.6t

全備重量: 229.0t

ジェネレーター出力: 3,849kW

スラスター総推力: 253,000kg

装甲材質: チタン・セラミック複合材

武装: 頭部メガ粒子砲×8

肩部メガ粒子砲×8

アイアン・ネイル×2

センサー

金属反応を感知するなどセンサー類は高性能。相手に察知される前にアウトランジから射撃する際にも役立つ。

マーカー

水中にマーカーを流し、味方機との合流ややり取りを行う。潜水用機全般に装備されている。

アイアン・ネイル

「砲台」としての設計上、近接戦闘用にいうより、アンカーとしての装備。

スラスター

ジャンプ力はザクの数倍あり、スラスターの推力自体は大きい。

脚部

上半身と比べアシバランスな小さい脚部だが、歩行ではなくホバーで移動する。

武装

ゾックの武装は「移動メガ粒子砲台」のコンセプトどおり、肩に片面4門×2の合計8門のメガ粒子砲と、頭部に1門のフォノン・メーザー一個のみ。砲の死角が少なく連射能力も高かつたため、ミサイルやロケット弾などの副武装の必要性は薄かった。クローアは格闘戦用ではないが、艦艇相手なら通用するだろう。



↑ 肩部フォノン・メーザー
砲は敵戦空襲や対戦車用に使われる。



↑ ゲートを設置するなど、威力だけではなく実戦での戦術も重要な要素だ。

vs RX-78 ガンダム

RX-78 ガンダムと交戦した際は、戦闘で損傷を追ったシャアのズックを逃がすため、一対一で向かい合ふ形になってしまった。ズックとしては「詰んだ」形であり、コクピットを打ち抜かれて壊破されてしまう。しかし操縦していたボラスキニフが、やむを得なかつたにせよズックの特性を考えず、前に出過ぎたために撃破されたとも言える。



RX-78 ガンダムと交戦した際は、戦闘で損傷を追ったシャアのズックを逃がすため、一対一で向かい合ふ形になってしまった。ズックとしては「詰んだ」形であり、コクピットを打ち抜かれて壊破されてしまう。しかし操縦していたボラスキニフが、やむを得なかつたにせよズックの特性を考えず、前に出過ぎたために撃破されたとも言える。

水陸両用機は、機関冷却に海水などを使用することで、通常のモービルスーザンよりも高出力を發揮できるジエネレーターを搭載していた。そして水陸両用機がこの高出力ジエネレーターの恩恵をもつとも受けているのは、兵装であると言つていいだろう。

一年戦争中盤当時、地球連邦軍よりもエネルギーCAP技術の確立が遅れていため、ビーム兵器をモビルスーツに搭載できずにいたジオン公国のモビルスーザンだが、水陸両用機にメガ粒子砲の搭載を可能としたのは、このジエネレーターである。

MSM-10 ゾックは、水陸両用機の「ジエネレーター高出力有利」という面を

手段としての水陸両用機

メガ粒子砲台化

最大限に活かし、それを極限まで効率化した機体だと言えるだろう。

ゾックに搭載された大型ジエネレーターの出力は3840キロワットという、当時のモービルスリー用ジエネレーターとしては破格のもの。これにより、局部的に前後4門ずつ、合計8門ものメガ粒子砲を装備することができるとした。各砲特に肩部メガ粒子砲の威力自体もゾックが装備しているものよりもさほど強力で、連射能力すらあった。

その反面、大型のジエネレーターとメガ粒子砲システムをボディに組み込んだため、全高23.9メートル、本体重量16.7・6トンといつて体を持つモビルスーツになってしまった。スマスター推力は25万3000キロという数値のは、歩行による機動確保をほとんどあきらめ、ホバー機能による移動を基本としない。

からも、他の水陸両用機のように、対戦などの水中で作戦行動する事はほとんど考えられていないかったのだ。水陸両用車は、単に冷却の問題の解消と、水中を移動手段として使う作戦行動を想定していなかったことにはならない。

機体の前後が対称という極めて特殊な構造も、姿勢や機体の向きにとらわれず砲撃出来るところを考えての事だ。つまり、それ程度までに機動性が劣悪になる事が想定されていたという事で、実質的な砲撃能力はメガ粒子砲4門というところになる。また、頭部のフォン・メーザーは制御構造のない場所での使用も考えた対策装備である。

こう考えると、ゾックとは、目的を絞つて開発された点は、実にジオンらしくないと見えるが、わざわざモビルスーザンという形態をとらないでもいい兵装とも言え、そういう意味では、何でもモビルスーツにしないと気が済まないといふ、実にジオンらしい兵器であると言える。

◆ 設定画はP109へ

主な配備地域

ゾックはキャリフォルニアベースで開発された試作機であり、3機が製造された。うち2号機はマッド・アングラー隊のシャアのものに送られ、ジャブロー攻略戦に参加している。残りの2機は北大西洋の潜水艦隊マンタレイに配備されたが、内1機は輸送中に連邦軍の攻撃を受け損失してしまったという。



▲マッド・アングラーチームは、地中からシャブローベースへ移入を終えた。

■ MAM-07

グラブロ

Spec

全長: 40.2m
 本体重量: 324.1t
 全備重量: 793.7t
 ジェネレーター出力: 11,000kW
 武装: アイアン・ネイル,
 7連装魚雷発射管×2、
 ブーメラン・ミサイル×2

潜水艦的モビルアーマー

ジオン公国軍が水陸両用モビルスーツを開発し投入した目的は、大まかにふたつあった。ひとつは海洋を航行する船舶（商船や艦船などを沈め、海域を封鎖する通商破壊作戦）。そしてもうひとつがジャフローに代表される連邦軍沿岸基地などを海中から上陸・占拠する強攻作戦だ。

そのどちらの任もモビルスーツに背負わせたのは、ジオン公国軍がモビルスーツの可能性を信じきっていたことだけでなく、スペースコロニー国家であるジオン公国が海洋で使用する艦船の開発に不慣れであつたため、よく知っているモビルスーツを転用した方が

ミサイル発射口

ブーメラン・ミサイルの発射口が2基、機体上部横に内蔵されている。

推進器

熱核水流ジェットエンジンを6基備える。推力を活かし、スコックやゴッグを複数発引することもあった。

アイアン・ネイル

航行時は後ろに格納し、水の抵抗を減らす。先端の硬度、強度、運動エネルギーは高く、ガンドムの胸を引きちぎるほど。



魚雷発射機構

正面に片側7連装×2プロックの魚雷発射管が並ぶ。弾頭も大きく、高威力。

武装

艦船を専門的に攻撃するグラブロの主武装は計14門の魚雷。航空機にはブーメラン・ミサイル（整流板がブーメランのようなのでこう呼ばれる）で応戦するが、破壊力は大きく大型機の撃墜も可能。また、弾頭を換えれば対艦攻撃にも使えると見られる。アイアン・ネイルのパワーハーは強大で、船底を突き破ることも容易。



→アイアン・ネイルは大きなガンドムの胸を簡単には壊する能力を持つ。

よいという結論に達したということもあるだろう。

確かに沿岸基地に海中から強襲をかけ、上陸後に基地守備隊と戦闘、制圧し占拠するといった作戦行動には、水上用モビルスーシーは有用だ。

しかし、上陸作戦はともかく、通常破壊だけを考へる必要はない。むしろモビルスーシーにだらうければ、ヨリ潜行・航行に適した形状にすることができる。大きさもモビルスーシーのサイズに縛られる必要がないため、より強力なジェネレーターが搭載可能であつたり、より多くの兵装を装備することができるばかりでなく、弾薬も多數搭載可能というメリットもある。結果、作戦行動がより柔軟で、強力なものにすることができるのだ。

vsホワイトベース隊

ズゴックとともに海中から一方的にミサイルで攻撃し、ホワイトベースやGファイターに大きなダメージを与えた。じりて海中に飛び込んできたガンドムに対しても優位に戦闘を進めたが、一度掴んだガンドムの脚を破壊することで自由を与えてしまい、それを機に反撃、撃破される。結果的に能力が仇になってしまった。



装甲

機体材質は超硬スチール合金だが、ガンドムのビーム・ライフルの照射を受けても水中では数秒耐えられる。

MAM-07グラブロは、まさにこのような観点からMIP社が開発した水中戦用のモビルアーマーだ。くちばしのような機体先端部やボディに2本のアームを供える構造などは同社のMAM-05ビグロ（ひいてはモビルアーマーの原形になつた試作機動兵器M-1P、X-1、とも似通つており、実際ベースはある程度共通であるといつ。推進器は熱核水流ジェットを6基備え、水上用モビルスーシーを上回る水中での機動性、航行能力を持つていた。

武装は機体前面に設けられた7連装X-2の魚雷発射管と、機体上部にある垂直発射式ミサイル（形状からブームランミサイルと呼ばれた）を2基、して3本のツメを持つアイアン・ネイルを装備している。

意外なことにグラブロはメガ粒子砲は備えていない。ブーメラン・ミサイルはホワイトベースのモビルスーシードキ下面を貫通（爆発を与えるなど攻撃力は十分に高く、また水中だけで行動するので、水中では威力の低下が著しいメガ粒子砲は必要ないとも言える。

しかし、グラブロは試作機のまま、量産されることはなかつた。その理由はおそらく、航行能力重視のコングがズゴックに取つて代わられたのと同じく、「アゴックで用が足りる」からだつたのだろう。

グラブロは性能は高かつたものの、戦争というトータルな視点で考えた場合、「豪華すぎる」兵器だったのかもしれない。

クチバシ

MIP社のモビルアーマーらしい意匠が現れている部分。メガ粒子砲は内蔵されていない。

◆ 設定画はP108へ

主な配備地域

グラブロは北米東岸サンディエゴ基地で試作機3機が開発されたのち、メキシコ湾で試験が行われた。試験後は1機が大西洋上にあったマッド・アンガラー側に配備され、ホワイトベース隊と交戦し撃破された。残りの2機は一年戦争終戦まで活動を続いた。終戦時はマダガスカル沖で2機とも連邦軍に拿捕されている。





■ AMX-109

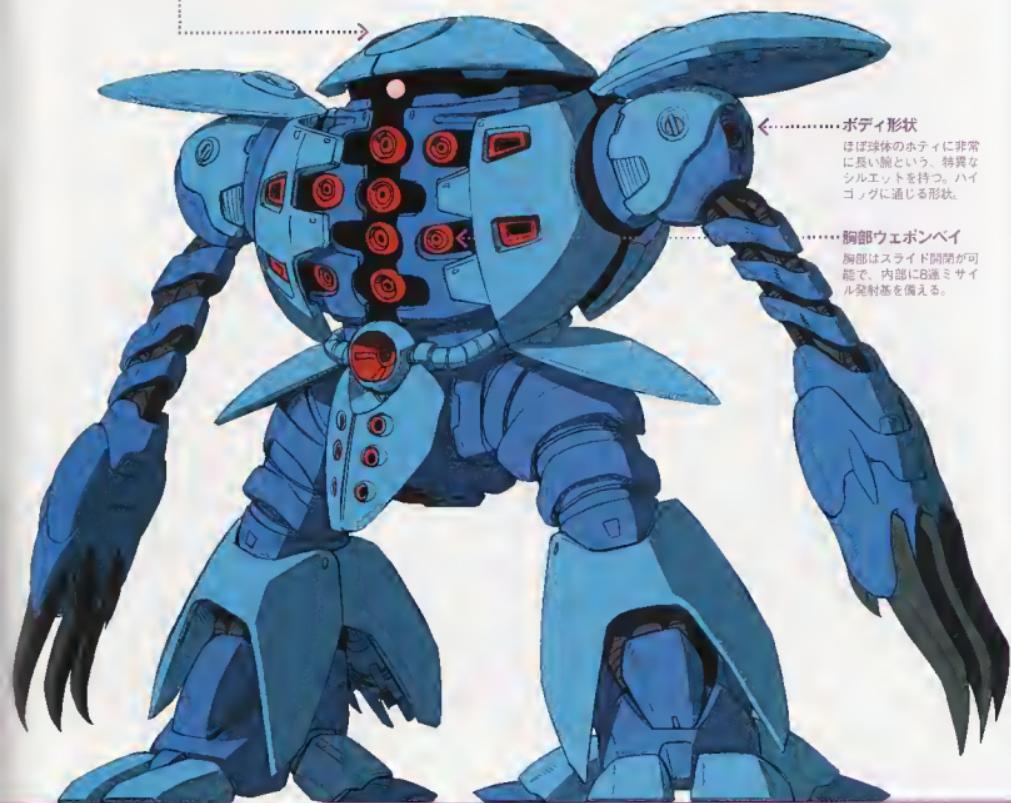
CAPULE カプール

コクピット

コクピットのハッチは頭頂部にある。そのため機体を海中に沈ませた状態でも出入りができる。

Spec

頭頂高: 16.5m 本体重量: 38.7t 全體重量: 57.5t ジェネレーター出力: 3,680kW
スラスター総推力: 6,800kg センサー有効半径: 12,300m (大気中) / 7,600m (水中)
装甲材質: ガンダリウム合金 (二重装甲)
武装: アイアン・ネイル×2、レーザー・ビーム、ソニックブラスト、ミサイル×8



ボディ形状

ほぼ球形のボディに非常に長い腕という、特異なシルエットを持つ。ハイコックに適した形状。

胸部ウェポンベイ

胸部はライド間隔が可能で、内部に2連ミサイル発射機を備える。

武装

武装はレーザー・ビーム、胸部ウェポンベイに収納されたミサイルとソニックブラストが主だった装備だが、ビームよりもミサイルが多用された。クローガーはガンドリウム合金製で旧来機よりも材質は優れるが、この時代はモビルスーツの装甲全般がガンドリウム合金に移行しており、特別なアドバンテージはない。



伝統の頭部ビーム砲は内蔵されておらず、ミサイルのみ武装となっていた。



ミサイルは海中、海上、さらにも使用できる。大きさによって、ミサイルによっても違う。

非正規軍でも運用可能な 「親切設計」の水陸両用機

vsアーラム&ZZガンダム

海中ではZZガンダムと戦ったが、水中での行動を基本的に考慮していないZZガンダムには全く歯が立たなかつた（パイロットの差も大きいと思われる）。停泊中のアーラムに攻撃を仕掛けたときは、海上を疾走するように移動しトリッキーな動きでミサイルを発射するなど、水陸両用機らしい活躍を見せている。



AMX-109カブールは、宇宙世紀0080年代後半に開発された水陸両用モビルスーツである。開発したのはアクシズ（後のネオ・ジオン）。勢力としてのアクシズの成立ちは、小惑星アクシズに難を逃れたジオン公国（残党勢力）であり、そういった背景を考えると、スゴックやゴッグなど水陸両用機の開発に携わったエンジニアが、カブール開発に関与した可能性は高い。武装の構成的にも一年戦争時代の水陸両用モビルスーツを意識していることが分かる。純粹な発展型とどうかは、スベック的にはカブールはしかし、スペック的にはカブールは

重装備で、本体重量は40トン弱、全備重量でも80トン弱とジオン公国軍の水陸両用機に比べて非常に軽い。これは機体サイズもさることながら、アクシズ（ネオ・ジオン）製モビルスーツの多くが採用していたガンドリーム合金の使用によるものでも大きい。ジエネレーター出力は水陸両用機の伝統どおり、同時期の一般的なモビルスーツに比べて高め。また、その航行性能は水中、水上共に良好で、ザク・マリナー（より巡航速度は遅い）。

こうして、一年戦争時の水陸両用機よりも大幅な性能アップを果たしたカブールだが、根本的な疑問も残る。それは、アクシズ（ネオ・ジオン）はなぜカブールを開発したのか、という点だ。ジオン再興というアクシズの目的を考えれば、地球攻撃に備え、自軍で使う水陸両用機を揃えておくためで

はないだろう。実際には共闘関係にあつた地球各地で活動を続けるジオン公国軍残党に供与し、その活動を支援する目的で作られたと考えるべきだ。

先に述べたようにカブールの性能は一年戦争期の水陸両用機と比べ進化しているが、一年戦争期の一般的モビルスーツと、第一次ネオ・ジオン戦争期の一般的モビルスーツの性能差に比べればその幅は小さく、目的に特化した特殊な装備や機構はない。

しかしそれは、性能的に均一化することで、ゲリラ的な組織でも運用やすい機体として作られたからではないだろうか。例えば粗末な基地でも整備でき、何の訓練も受けっていない民間人の子供でもすぐに操縦できる。水陸両用機としてのカブールの特徴は、そういった特殊な運用形態でも機能できる点にあるといえる。

ところが現実的には、地球の本物の海を知らぬスペースノイドが開発したということで、カブールを用いる旧ジオン公国軍残党には信頼されないという、皮肉な形になってしまった。

航行形態
手足を収納してボールのよう丸まった状態で航行する。海中のまなづら、海上をホバーのように飛走することもできる。

◆ 設定画はP115へ

主な配備地域

カブールは水陸両用機であるため、小惑星（コロニー）を拠点とするアクシズ自身より、地球上に存在するジオン公国軍残党がアクシズからの援助として受領し、配備を進めていた。ザク・マリナーなどとの混成部隊としてゲリラ的な運用をされることもあり、その際には現地の少年兵が操縦を行うことすらあった。



◆ アフリカ南端ビザウのオニ軍後部隊、陸下し



◆ 配備されても古参のパイロットは信頼せず、飛行を避ける事多かった



連邦軍（ジム）系

通常海軍力の高さゆえに突出した性能の機体は誕生せず

高性能化に腐心したジオン公国製水陸両用モビルスーツとは大きく異なる
地球連邦軍の水中用モビルスーツ事情。それは一体どのようなものだったのだろうか。

沿岸警備が行える 程度の能力で十分

一年戦争の長期化にともない、ジオ
ン公国軍は地球侵攻作戦を開始した。
北木大陸などの足がかりを手にしたジ
オン公国軍は、地球連邦の輸送網を断
つべく通商破壊作戦を行なうほか、海か
ら沿岸基地を攻撃・占拠し勢力の拡大
を図る。これらの活動で主役を務めた
のは、水陸両用モビルスーツであった。
しかし、地球連邦軍はこれらジオン
公国製水陸両用モビルスーツに対抗す
る水陸両用（あるいは水中用）モビル
スーツを開発することには消極的であ
った。その理由はいくつか挙げられるが、
ひとつは0079年11月のオデッサ作
戦の勝利。そして直後のジャブロー侵
食の止め、ジオン公国軍の地球に
作戦でのノウハウが蓄積されており、

おける勢力圏を急速に縮小させること
に成功し、宇宙へ追いやったことが
ばられる。つまり、その脅威は徐々に
縮小していくことになる。

地球連邦軍がはじめて量産したモビ
ルスーツはRGM-79だが、ジムの量
産化が軌道に乗り始めたのが0079
年10月だ。つまり、ジムをベースにす
るなり新規に作るなりで地球連邦軍が
水陸両用モビルスーツを開発し、配備
を終える頃にはその意味が薄らいでし
まっていたのだ。それよりは来るべき
宇宙やコロニーでの決戦に備え、通常
(宇宙用)のジムあるいは派生機開発に
注力する方が合理的である。

もう一つは、スペースコロニー国家
のジオン公国との違いだ。そもそも海
洋戦力の多くが失われ、実質戦力は逼
迫していたとしても、連邦軍には海洋
作戦でのノウハウが蓄積されており、

地上や宇宙の戦いと同様、モビルス
ーツへの対策万法も徐々に確立されてい
たと見られるからだ。核融合炉を搭
載した水陸両用モビルスーツの速力や
航行能力は非常に高いが、ガソリン入りの
搭載の対潜ミサイルでスコックなどを
撃破したケースもあり、戦術を毫忽さ
せれば既存の対戦兵器や戦術の応用で
対応も十分可能だったのだ。

そんな中で地球連邦軍により開発さ
れた水中用モビルスーツRAG-79ア
クア・ジムは、拡張性の高いRGM-
79ジムを改修し、水中用推進器や対艦
船用の魚雷やミサイルを装備したとい
う。ある意味でジムのバリエーション
として至極オーバードラクスな造りの方
がなされている。ジエネレーター出力も
ベースのジムとほぼ変わらず、ジオン
公国軍が水陸両用機で実現してみせた
ような意欲的な装備やシステムもない。

アクリア・ジムは後継機が造られるこ
ともなく、0090年代に入つても現
役で使われ続けた事実がそれを物語つ
ているといえるだろ。

それは伝統的な海軍力をもつ地球
連邦軍が水中用モビルスーツに求めた力
が、沿岸警備的なものに近づいた
うことなのだろう。

ジオン公国軍の水陸両用モビルス
ーツや艦艇と競うにしても、味方艦艇や
航空戦力と連携して戦にあたることが
できる。そのため、モビルスーツが必
要とされる状況は、洋上ではなく、上
陸作戦を阻止するという一点において
で充分だつた。つまり、単機あるいは
少數で、あらゆる海軍的な任務にあた
らなければならないジオン公国軍の水
陸両用機とは、使われる状況が全く異
なるのだ。結果的に高性能である必要
はなかつたのだろう。

アクリア・ジムは後継機が造られるこ
ともなく、0090年代に入つても現
役で使われ続けた事実がそれを物語つ
ているといえるだろ。

■ クローズアップポイント ■

51

④ 体形

ジムをベースにしているため、ジョン公国軍の水陸両用機に比べ人型により近いシルエットである。その分耐圧深度や速力は低め。

④ 推進器

肩や脚部、背中に水の中用の推進器を装備。計測方法（表記方法）が異なるのが、ジョン公国軍の水陸両用機より推力の数値はかなり低い。

④ 武装

乗組や水中用ミサイルなどが主武装で、陸上で使える武装は皆無。陸上では陸上に適した機体を運用すればよいという、数に優れる連邦軍らしい「分業」の姿勢が表れる。



■ アクア・ジムの進化 ■

UC.0079

RAG-79-61

水中型ガンダム

頭部アンテナ形状から
ガンダムと名づけられ
たが、実態はアクア・
ジムの武装や推進器に
小変更を加えたもの。



UC.0079

RAG-79

アクア・ジム

PGM-79ジムを基に各
種水用装備を付加。
完成度は高いとはい
かないが、戦後も長く使
われ続けた。



■ RAG-79

アクア・ジム

Spec

頭頂高：18.0m

本体重量：49.5t

全備重量：64.3t

ジェネレーター出力：1,280kW

ハイドロジェット・総推力：8,950kg

センサー・有効半径：4.300m

装甲材質：チタン・セラミック複合材

武装：魚雷ポッド×2、大型魚雷×2

ミサイル・ランチャー

ビーム・ピック×4

敵と戦うばかりが
任務ではなかつた！

母艦を叩くための機体であるといえる
だろう。

RAG-79アクア・ジムは地球連邦
軍の主力モビルスーツであるRGM・

79ジムを使った水陸両用機だ。

関節に防水処理を施し、ランドセル
をハイドロジェット・ユニットに交換

することで水中での機動力を確保。武
装は標準＆大型サイズの魚雷を中心と
した雷撃戦仕様となっていた。

本機は、性能的にも武装的にも公国
軍の水陸両用機と、水中で雌雄を決す
ことができる機体ではなく、ユーロ
ン級やマッド・アングラー級といった
ジオン公国軍海上モビルスーツ部隊の

うが効率がいいという考え方。
また、コストガード的な役割もあ
るといえるだろう。沿岸警備網の一翼
として機能し、潜水艦などと戦闘を行
うが効率がいいという考え方。

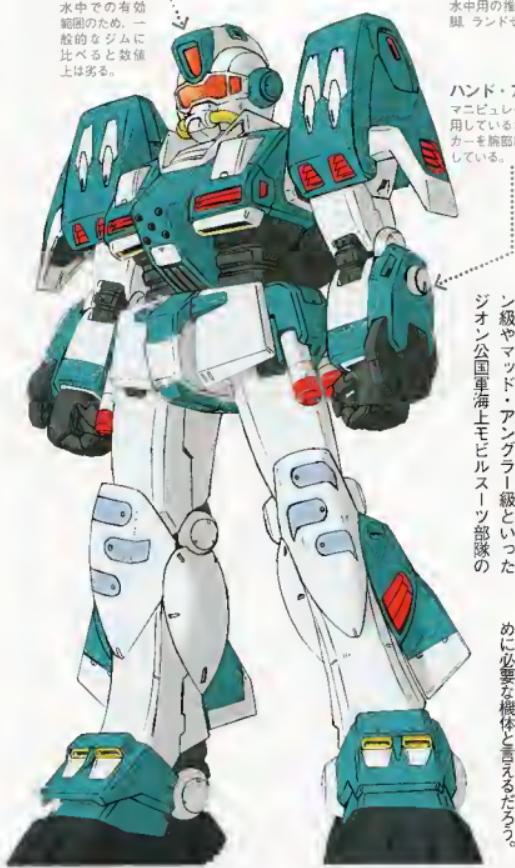
モビルスーツとの本格的な戦闘は対潜
哨戒機や基地防衛の陸戦部隊に任せられる。
アクア・ジムは、様々な兵器と搭載体
制を駆き、状況に迅速な対応をするた
めに必要な機体と言えるだろう。

センサー
水中での有効
範囲のため、一
般的なジムに
比べると数値
上は劣る。

推進器

水中用の推進靴を肩、
脚、ランドセルに搭載。

ハンド・アンカー
ミニピュレーターを採
用しているため、アン
カーを腕部に別に装備
している。



→ 設定画はP124へ

主な配備地域

ダカール沿岸やアマンソン川河口など、海に
面した重要な拠点には必ず配備。また、味方
艦艇や航空機とタッグを組み外洋で「ジオ
ン潜水部隊戦」にも参加。



vs水陸両用機

通常の魚雷より速度で前行するジオン水
陸両用機を魚雷で刺すのは至貴の技。反面、
敵には対処するとはいえたが粒子武装があ
る。難渋的にはやや不利。



武装

魚雷のほか、先端を敵機の装甲に押し付け
るとスイッチがありビームが発生するビ
ーム・ピックと呼ばれる近接用兵器も持つ。
ビーム・サーベルより効率的。



Marine Type Gundam

RAG-79-G1

水中型ガンダム

ジェネレーター 出力

偏向ビーム・ライフルを使うため、若干出力がアップしている。

推進器

肩のユニットを小型化し、逆にランセルセルを大型化している。ハーブーンカンや偏向ヒーム・ライフルを構えたままの航行がしやすくなつた。

Spec

頭頂高：18.3m

本体重量：47.7t

全機重量：58.5t

ジェネレーター出力：1,330kW

ハイドロジェット総推力：9,670kg

センサー有効半径：4,600m

装甲材質：チタン・セラミック複合材

武装：魚雷×2、ビーム・ピック×2

炸裂式ハーブーン・ガン

水中用偏光ビーム・ライフル

エネルギーCAP技術の優位を 水中用モビルスーツに投入

ムは、ランドセルや脚部の推進器を新
型に換えられているほか、武装もアク
ア・ジムとは大きく異なっている。

もっとも大きな違いは水中用偏向ビ
ーム・ライフルを装備している点だろう。

陸戦用モビルスーツと比較すると、そ
うしてもスベックや武装の面では見劣
りがした。そのためRAG-79をベー
スに、対モビルスーツ戦闘を行うこと
ができる機体も開発された。通常は方
ンダムからジムへという開発の流れが
あるが、本機は外見がガンダムに似て
いるからガンダムと名付けられたとい
う経緯があり、RX-78 ガンダム直系
の機体というわけではない。

これは水中でのビームの減衰をおさえ
るためにビームの収束率を高めたもの
で、通常ビーム・ライフルよりビーム
が細くみえるという特徴がある。

この装備により、ジオン公国軍の水
陸両用機に対し、少なくとも武装の
面では対等以上といえるだろ。

本機は一部のエース用の機体とされ
るが、戦闘記録がほとんど残されてい
ないため、その真偽は不明である。

主な配備地域

アクア・ジムと大差はないが、より機能的
な水陸両用機との戦闘を考慮した対沿岸戦
や警備地域には積極的に投入。パイロット
も選抜された優秀な者を搭乗させた。



vsジオン公国製水陸両用機

武装の変更によりジオン公国製水陸両用機
との戦闘はアクア・ジムより有利となった。
ジェネレーター出力は比較して低いが、エ
ネルギーCAP技術でそれを補う。



武装

魚雷のほか専用装備として偏向ビーム・ラ
イフルを持つ。また、銃の先端に炸薬を仕
込み、装甲を突き破った後に爆発すると
いうハーブーン・ガンも新しい装備。



■ ZMT-A31S

ドッゴーラ

Spec

全長：369.3m

本体重量：51.9t

全備重量：146.3t

ジェネレーター出力：11,920kW

スラスター総推力：548,460kg

(54,980kg×6, 20,170kg×10,

85,000kg×2)

装甲材質：チタン合金オセラミック複合材

武装：ビーム砲×10

ミサイル・ランチャー×2

腕部ビーム・ガン×2

テール・ビーム・ガン×2、他

全環境に適応させた
超大型モビルアーマー

ドッゴーラはザンスカール帝国の開

発した試作モビルアーマーで、最大の特徴はその構造にある。コンテナ状のブロックを無数につなげ、まるで蛇のように長く伸ばしたテール・ラッドと呼ばれるコンボーネントと本体（蛇の頭）に相当する）と構成されている。

ドッゴーラは特殊な存在だが、水中用モビルアーマーとして開発されたわけではなく、宇宙空間から大気圏、水中まで全環境で運用できる機体だ。パイロット艤装アラステアのよう、ザンスカール帝国は地球圧制の際に宇宙で使用できる兵器をそのまま地球上でも使おうとする傾向があった。ドッゴーラの万能性も、このザンスカール帝国の志向に通じる機体だ。

また、このテール・ラッドを切り離して複数のユニットとしてフォーメーションを組んだりといった、通常のモビルスーツやモビルアーマーでは真似

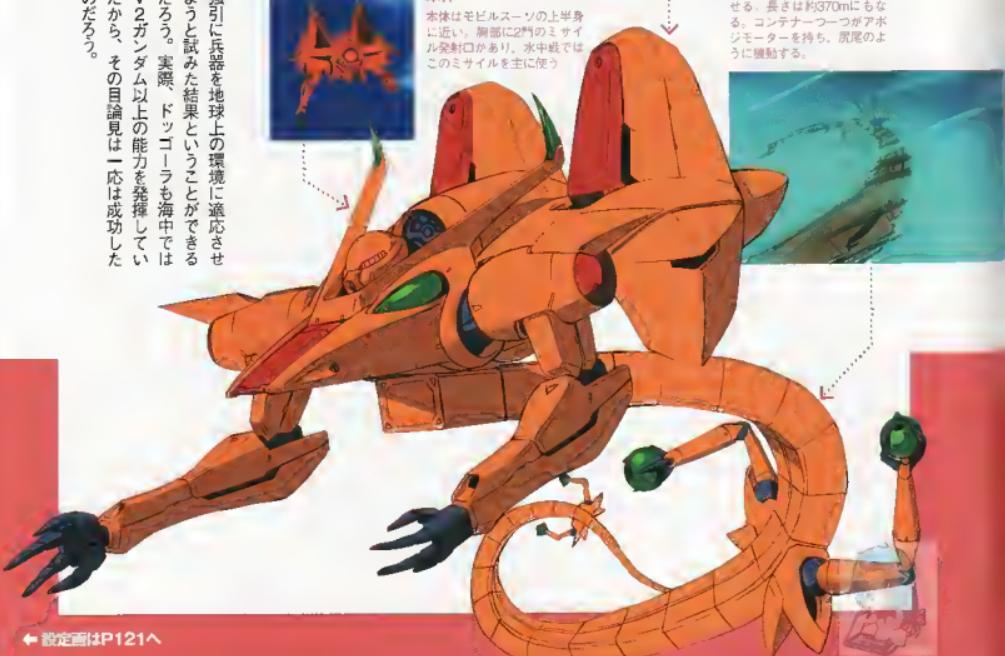
ができる。

このテール・ラッドを切り離すことで、このテール・ラッドのブロックはダメージを受けた場合そのパートのみを切り離し、前後をつなぎなおすことでダメージの影響なく戦闘を続けることができる。



本体

本体はモビルスーゾンの上半身に近い。胸部に2門のミサイル発射口があり、水中戦ではこのミサイルを主に使う



武装

ビーム兵器からミサイルまで一通り持つ。変わったところではモビルスーツを縫める射出式ネットを胸に内蔵している。



テール・ラッド

四角いコンテナ状のバーを蛇の胴体のようにつなぎ合わせる。長さは約370mにもなる。コンテナ一つがアームジモーターを持ち、尻尾のように駆動する。



水陸両用MSのカラーバリエーションを想定する

迷彩



水陸両用MSのカラーバリエーションを考える

機動戦士ガンダムの映像を見て、モビルスーツの塗装はいろいろ。設定通りのほぼ種類で、時々迷彩（色迷彩）が登場する程度だった。しかし、アニメーションの世界を少し離れて、宇宙世纪という世界で実際に何が行われていたかということを考えると、おそらく様々な状況にフィットさせるために多様な塗装や迷彩が使つたのである。むしろ、『宇宙世纪の世界で迷彩』と云うよりも、『迷彩で宇宙世纪の世界で遊ぶ』と云うべきなのではない。ところが、これは水陸両用モビルスーツの塗装を考えてみると、なむ、これは戦場となる機体の設定は、本筋想回で「それいっこ」考えてみたものであり、いわゆる甲板せんの「オフィシャル設定」ではないことを付け加えておく。つまりモビルなどを独自の塗装で表現する時、参考などはなれば幸いである。

ジャングル地帯を
想定した迷彩

MSM-03

ジャブロー攻略前哨戦
通商破壊作戦機カラーリング

想定設定

0079年10月頃に通商破壊作戦の為、主に北大西洋の作戦海域に投入された機体。艦隊旗艦マッド・アングラーを補給・整備拠点とし、数隻のユーコンからなる潜水艦隊に所属して行動を行っていた。

機体解説

陸上での行動時間に制限のあったゴッグであったが、洋上での運用には制限もなく、また、フリージャードや船団護衛や港湾に敷設された機雷除去に有効な為、通商破壊作戦に多くの機体が投入された。生産開始後の初期に実戦配備され、0079年10月頃に通商破壊作戦の為、主に北大西洋の作戦海域に投入された。ジャブロー攻略戦が失敗に終わった後も同海域で、通商破壊作戦、港湾施設への攻撃などをゲリラ戦的に継続投入され、終戦まで連携を保ませた。

迷彩説

北大西洋を作戦海域とした当機の塗装は、海洋哺乳類もしくは大型魚類を模したと思われる面白いシールブルーからシーグレーが背面から側面に、薄いグレーを正面腹部に塗装され、主に海面直下の暗い水深を潜伏遊んで、敵船を探索、攻撃するのを目的としている。機体にある赤い数字の「703」はユーコン「U-707」所属の3号機と言われ、基本的にユーコン1隻には2機のゴッグが搭載された事から、マッド・アングラーに残された予備機と思われる。また、コクピット前にキルマークから、結果として4隻の輸送船を撃破したようである。初期の塗装のみに機体番号や所属が判る記入があったようだ。

海洋哺乳類もしくは
大型魚類を模した迷彩





ジャブロー攻略前哨戦 偵察機カラード

機体設定

0079年10月に、ジャブロー攻略の前哨戦であるジャブロー近傍の連邦軍拠点への攻撃に際し、前線偵察作戦に投入された機体。

機体解説

ジャブロー攻略の前哨戦であるジャブロー近傍の連邦軍拠点への攻撃に際し、前線偵察作戦に投入された機体。南米に於けるジャブロー攻略戦に際して陣営となり得る基地を目標として前線作戦を行った。この機体は0079年10月に、前線偵察作戦に投入された機体。南米に於けるジャブロー攻略戦に際して陣営となり得る基地を目標として前線作戦を行った。この機体は0079年10月に、前線偵察作戦に投入された機体。



MSM-03 ジャブロー攻略前哨戦 上陸戦機カラード

機体設定

0079年11月のジャブロー攻略の前哨戦として行われたジャブロー近傍の連邦軍基地攻略戦に投入された機体。

機体解説

ジャブロー攻略戦のために開発されたゴッグが、その目的通りの作戦に投入されたのが当機。0079年11月のジャブロー攻略の前哨戦であるジャブロー近傍の連邦軍基地攻略戦に投入された機体で、南米のジャングル地帯にある基地を攻撃目標として、沿岸部より先行上陸、制圧作戦を行い後続部隊の橋頭堡を築く任務にあたった。同様の作戦を繰り返しながら一歩一歩前進していく。作戦開始への道筋をついた。ジャブロー攻略本戦にも投入されたが、ジャブロー基地付近に迫った際に撃破された。



機体解説

当機は作戦時、偵察場所が泥濘地もしくは爆撃による荒地とした地帯だったようで、基本塗装のオーラン、グレー部分をカウンターシェード化した塗装で作戦を行った。夜間に上陸。その後移動を繰り返し、高い塗装の為、昼間はほぼ動かず戦闘するので偵察行動のパートンであった。偵察部隊はジョン各軍が個別に持っていたが、水陸両用MSのみは海軍及び海兵隊での運用だった。ただし、当機を含めジャブロー攻略戦時にはノーマーキングだった為、この時点での所属は不明である。



泥濘地もしくは
荒地用偵察迷彩

MSM-04 東南アジア 偵察機カラード

機体設定

ジャブロー攻略戦で偵察作戦に投入後、0079年12月に東南アジア戦域の偵察部隊へ再配属となった機体。

機体解説

0079年12月に東南アジア戦域の偵察部隊へ再配属となった機体。その後、海軍偵察部隊へ配属され、東南アジア戦域の部隊所属となった。この東南アジアは作戦地域とする部隊は偵察部隊ではなく、軍事政権やイノフなどと強襲・攻撃するゲリラ戦部隊で、強快な運動性が特徴のアッガミのみで編成され、作戦を終戦直前まで継続した。所属部隊は終戦直前に解散となり、部隊の詳細やこの機体のその後は不明となっている。



機体解説

この機体はその部隊の代表的な迷彩塗装を施している。基本塗装の薄いグリーンの上にやや濃いグリーンヒップラックグリーン、ブラウンで横縞模様に迷彩が施され、東南アジアに多い深いジャングルに適応させていた。当機を含め所属機はノーマーキングだったと言われる。また、基地を海上のマッド・アングラーとしていたとの事で、一部の機体には海賊旗が描かれていたとも言われるが再配属前も同種の海賊部隊に所属していた可能性が高い。



東南アジアに多い
深いジャングルに
適応させた迷彩



MSM-07

ジャブロー攻略前哨戦 夜戦仕様機カラーモード



基準設定

0079年11月頃、ジャブロー攻略の前哨戦として行われたジャブロー近傍の連邦軍基地攻撃戦において、夜戦における奇襲を前提とした機体。

機体解説

この機体の所属部隊は、ゴッグを先方に敵前へ強襲する大規模な上陸作戦ではなく、ズゴックの陸上行動時間の長さを生かした沿岸より深部にある農場地帯への浸透奇襲攻撃を数多く行った。部隊の詳細は不明であるが、ズゴックのみで編成された独立した強襲部隊であったようで、侦察部隊と連絡した情報などに小規模な制圧作戦に従事していたようである。ジャブロー攻略戦にも参加、後も継続して南米地域で同種の作戦を行ったとの事である。

主武装

陸上奥地に浸透奇襲攻撃を行うべく現地にて迷彩された当機は、ズゴックの基本塗装の上からブラックをオーバースプレーされていたようで、塗料品質が悪いのか、エッジの部分には塗料が飛らず色が透けている。また、機体全面ではなく、腕部と脚部は半分しかオーバースプレーされていない。その事から、当機は作戦開始前に夜戦、夜戦を意識した部隊塗装を施されたようである。当部隊の所属機は昼夜、場所を問わずに作戦を遂行し、その都度、簡単にながらも作戦環境にあった迷彩を施されていたとの事である。

夜戦を意識した
即席塗装

ズゴックの
基本塗装を
応用した迷彩



MSM-07

南太平洋 通商破壊作戦機カラーモード



基準設定

0079年12月にユーコン艦隊の通商破壊作戦部隊配属となり、南米からオーストラリア近海まで含む南太平洋地域を作戦海域とした。

機体解説

当機はジャブロー攻略戦後における水陸両用MSの残存機体の再記録で、0079年12月にユーコン艦隊の通商破壊作戦部隊配属となった機体。南太平洋地域を作戦海域とし、ジャブローからのオーストラリアや東南アジア間の輸送を断滅すべく活動した。輸送船団護衛の潜水艦と至近距離で会合、水中での機動力を活かしクロス攻撃を仕掛けるが潜水艦に近付く過ぎたために衝突、海中へ没した。潜水艦の被害は甚微で、唯一の潜水艦による撃破として記録されている。

機体解説

当機の迷彩は主に海中での活動を重視したもので、ズゴックの基本塗装に使用された濃淡2色のブルーと濃いブルーグリーン1色で不規則な横縞の迷彩を施された「カジコのタマゴ迷彩」と呼ばれている。腕部、脚部の一部や足首は迷彩を施していないか何脚部のみが隠れ切割るのを模ったようである。多くのズゴックは、明るい海域では基本塗装が水中での迷彩効果に優れていたためか大槻部の迷彩変更例はない。また、多くの水陸両用MS同様に爪は無塗装。





北海 通商破壊作戦機カラー

想定設定

0079年12月に北大西洋から北海までを含む北西ヨーロッパ方面を作戦地域とした通商破壊作戦および敵施設破壊工事に投入され、通商破壊作戦を行なうながら連邦要衝のベルファウスト基地を頻繁に襲撃。連邦からは「ノルト・ワン」とコードネームをつけられ要警戒の対象とされていた。連邦側の記録によると、数度目のベルファウスト来襲の際に陸上からの大口砲兵が左肩部を直撃、小爆発をおこし戦闘から離脱。その後、機体によりパラストランクをやられたのが済んで下されずそれを逃走中のところを頭部中の2機のドン・エスカルゴにより発見され、撃破された。

機体解説

北大西洋から北海までを含む北西ヨーロッパ方面を作戦地域とした通商破壊作戦および敵施設破壊工事に投入され、通商破壊作戦を行なうながら連邦要衝のベルファウスト基地を頻繁に襲撃。連邦からは「ノルト・ワン」とコードネームをつけられ要警戒の対象とされていた。連邦側の記録によると、数度目のベルファウスト来襲の際に陸上からの大口砲兵が左肩部を直撃、小爆発をおこし戦闘から離脱。その後、機体によりパラストランクをやられたのが済んで下されずそれを逃走中のところを頭部中の2機のドン・エスカルゴにより発見され、撃破された。

機体解説

当機の迷彩は再配備後に塗り直されたと思われる、冬場の北太平洋を意識した暗いグレー、ブルー、グリーンの3色を使い、パターンも幾何学模様で施された。この迷彩はよく船舶に施されているもので、ソックの大きさから選ばれたものであろう。この機体は陸上陸上攻撃した記録がない事から、洋上からの攻撃に終始していたのでこの迷彩にも納得がいく。ソック自体の生産数が少ない事と、各機体はおのの独立の迷彩が施されていたから、その迷彩の特徴から当機の連邦軍側から個別のコードネームを付けられ動向を注視されていた。



冬場の北太平洋を

MSM-10 地中海 通商破壊作戦機カラー

想定設定

0079年12月、東部ヨーロッパ戦線を睨んで地中海に派遣された機体。通商破壊作戦の他、海上からの地上軍援護射撃も行った。

機体解説

0079年12月、北大西洋から北海までを作戦地域とした通商破壊作戦および敵施設破壊工事に投入されたが、直後、オデッサ要塞急速に悪化した東部ヨーロッパ戦線を睨んで地中海に派遣された機体。通商破壊作戦の他、海上からの地上軍援護射撃も行った。これにより「メド・ワン（地中海の大物）」と連邦からコードネームをつけられていた。この機体は、主にパリカン半島沖からアレキサンドリア近海にて活動時に陸上支援攻撃などで度々も損傷を受けるながらも撃破されず、終戦時ににおいても健在で、その後はアフリカ方面のジョン残党軍に参加したとされている。

機体解説

当機も「ノルト・ワン」同様、ジャブロ一派では通った迷彩だったと思われる。地中海派遣にあたっての迷彩は、基本塗装の薄いグリーンの上に濃いグリーンやかな地中海を意識した深いグリーンとほぼブラックに近いグレーの2色を、独立したドットパターンで幾何学模様を描いたものにされた。この迷彩は遠方から「ターン」がかなりぼやけて見えたので、洋上からの攻撃に終始していた事から選ばれたのであろう。また、迷彩の効果でこの機体が生き残ったとは思われず、パイロットの技術に負うところが大きいと推察される。





出張版

ヤマザキ軍曹のプラモバカ一代 水陸両用機MS考



立体的なアプローチで考える



MSM-07 ZGOK ズゴック

すでに発売から7年以上を過ぎたキットであれながら、フォルム、可動共にいまだ色あせない完成度を誇るMGらしいキット。

MG 量産型ズゴック
1/100スケール組立プラキット
2003年5月発売
価格：3150円（税込）
発売元：株式会社バンダイ





それぞれの機体の特色を



MSM-03 GOGG
ゴッグ

完成したそのボリュームは、価格以上の満足度！
少ない部品点数ながら水中航行態の可変機構まで再現した好キット！

MG ゴッグ
1/100スケール組立プラキット
2003年6月発売
価格：3675円（税込）
発売元：株式会社バンダイ

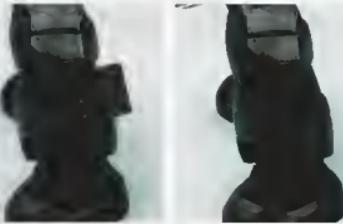




MSM-07 ZGOK



WEAPON LATCH



オプション用ウェポンラッチ

▲腕部・脚部には武器搭載用のマウントを増設。オモチャのブロックを本体・武器に取り付け、取り外しが可能なマウントとしてある。

劇中、ガウ攻撃空母からジャブローに降下した部隊の1機を想定して製作。さすがにあの装備・あの色でジャングル戦闘はヤラレに行くようなもんですからねえ。

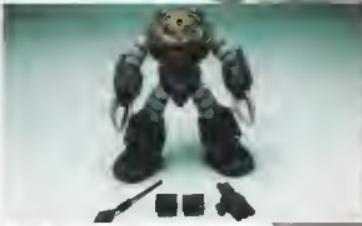
HEAD



頭

▲通常の海戦用の水色から急遽ジャングル戦用の迷彩が施され、頭部にはカモフラージュネットを取り付けるフックも追加。

WEAPON



武器

▲後に生まれたガンドム作品に登場したジオンMSの武器を追加。ジャブロー隊に登場したジャイアント・バズのグフへのオマージュ。

この際、水上戦闘よりも湿地戦闘を行った大半を占めると考え、上半身の迷彩は海戦用からジャングル戦に対応するため迷彩塗装(イメージはベトナム戦争時に誕生したタイガーストライプ)を施した。

腹部には前の戦闘で受けた被爆箇所をカバーしたバッヂ状の追加装甲を追加。左右腕部には武器マウントを増設。右手には「0083」に登場したジオン軍MSの携行火薬バンパイアーファウスト、左腕には「08小隊」に登場したグフ・カスタムの装備「3連ガトリング砲」を追加。脚部にサク用の「3連ミサイルポッド」も増設。

映像内でもジャブロー攻撃戦はグフでさすがにあの装備・あの色でジャングル戦闘(のハズ)。湿地となるジャングル戦では腕部のメガ粒子砲の威力も一定せず、頭部の6連ロケットランチャーは

ズゴックorゴツグ?
選択で迷ったあげく……

今回の「モビルスイツ全集・水陸両用MS編」では、ズゴックとゴツグのどちらか……と思つてたんだけど、結局選択できず「両方」つて方向に……、フレージャードもないのに機関銃に入つて、いたカンジです、ハイ。

量産型ズゴックでは、ガウ攻撃兵器に搭載され、ジャブロー一攻略の降下作戦に投入された機体を想定。

この際、水上戦闘よりも湿地戦闘を行った大半を占めると考え、上半身の迷彩は海戦用からジャングル戦に対応するため迷彩塗装(イメージはベトナム戦争時に誕生したタイガーストライプ)を施した。

腹部には前の戦闘で受けた被爆箇所をカバーしたバッヂ状の追加装甲を追加。

左右腕部には武器マウントを増設。右手には「0083」に登場したジオン軍

MSの携行火薬バンパイアーファウスト、左腕には「08小隊」に登場したグフ・カ

スタムの装備「3連ガトリング砲」を追

加。脚部にサク用の「3連ミサイルポ

ッド」も増設。

さすがにあの装備・あの色でジャングル戦闘(のハズ)。湿地となるジャングル戦では腕部のメガ粒子砲の威力も一定せず、頭部の6連ロケットランチャーは

ゴッグは劇中のベルファスト基地への強襲作戦をイメージして製作。「水を吸い込む」「やたら重い」に重点を置いて、映像でのゴッグを表現。やっぱり「怪獣」ですね。



頭部&ランドセル

▲耳(?)にあたる部分、ランドセル水流ジェットの取水口を追加。「さすがゴッグだ何ともないぜ！」のフリージーヤード射出口も新造。



肩部と腕部収納

▲装甲補強用のリムを追加。キットは普通に組んでも腕・脚の引き込みが可能で巡航性能に変形。「初の可変MS」なんだよな、ゴッグって。



BALLAST



腰部分とバラスト装備

▲腰周り上部にも取水口となるダクトを増設。四角い箱状の物はパラスト。深く潜るためにオモリはけっこう重要なアイテム。

发射本勢を取らなければならぬ。追加武装は必要でしょ？ 格闘戦は両手のアイアン・ネイルで一人分だから追加してません。後に誕生したガンダム作品から設定期を流用してやると、こんな装備も「アリ」じゃない？

の冷却水タンクが、胸部にあると想定して、それを保護するため。

腰の周辺に取り付けたボックス状の部品は武器や強化ユニットではなく、単なるバラスト、つまり「錘（オモリ）」。敵

の監視網を抜けて、接岸のために深く潜行する際、機体重量 & 機体内の海水バラストタンクだけでは重量不足と仮定し、

いかにも「オモリ」って感じに見えるタマリを取り付けた。上陸時には機動力の低下に繋がるので本来は切り離されるところだが、こうしまつて大きさで止まる。

この仕事の醍醐味を理解して帰選すると一流的ゴッサム乗り……なんて設定するのも面白いかと。腕は各リムのフレームで延長。全体で1センチほ

ど延伸。前屈みで腕をダラ〜って感じがゴツグのイメージよ。 ブラモによる「妄想MSS製作」これ

そガンダムの楽しみの本流だと思つた。

機動武闘伝 Gガンダム

初代「ガンダム」の富野由悠季監督以外の手による初のテレビ作品。宇宙世紀を舞台としていないのも特徴。主役メカもモビルスーツ(MS)ではなく、モビルファイター(MF)と呼ばれるロボットが活躍する。未来世紀(FC)、戦争による荒廃を避けるため、地球の断滅をかけて戻るガンダムファイターたちの物語である。

DATA ●放映年、94年4月～95年3月●キー局、テレビ朝日●話数：全49話



GF13-026ND
マーメイドガンダム

ネオデンマーク所属のMF。ガンダムファイターは、ハンス・ホルガー。第29話「試合放棄！？ 恋にドキドキ、サイ・サイシー」から登場。



P-1439
ペストコントローラー

ネオメキシコの水陸両用MS。逃亡したガンダムファイター(チコ・ロドリゲス)を捕らえるために使用された。第7話「来るなら來い！必死の逃亡者」に登場。



GF13-012NN
バイキング
ガンダム

ネオノルウェー所属のMF。ガンダムファイターはエリック・ザ・バイキング。ガンダムでありますから、その活躍はマイチ。第21話「決勝迫る！ タイムリミット3日前」から登場。



ALL GUNDAM AMPHIBIOS MOBILE SUIT&ARMOR オールガンダム水モビ 大集結!



このページでは、本誌に掲載されている宇宙世紀を舞台としたガンダム作品外のガンダムシリーズにスポットをあてて、各作品に登場した水陸両用(水は水中用)のMS、MAなどを取り上げてご紹介！

□創造、サンライズ □創造、サンライス、毎日放送





「Gガンダム」の番組枠の次作であり、前作同様、宇宙世紀を舞台にしないガンダム作品。前作が機動戦士が機械的に対し、今作は「ガンダム」と同じミリタリー路線のシリーズな内容。AC(アフターコロニー)195年、地球衛生士団を画策する秘密結社OZとそれに反対するガンダムと戦士たちの物語である。

DATA ●放送年: 95年4月~96年3月 ●キー局: テレビ朝日 ●話数: 全49話



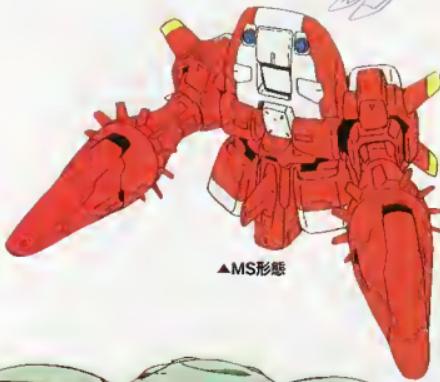
OZ-09MMs バイシーズ

OZの水中用可変MS。先端部分には作業用マニピュレーターを備える。第2話「死に神と呼ばれるガンダム」から登場。主なパイロットはミューラ。

▲水中巡航モード



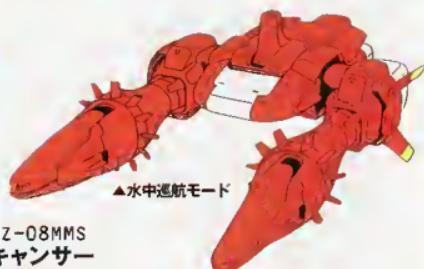
▲MS形態



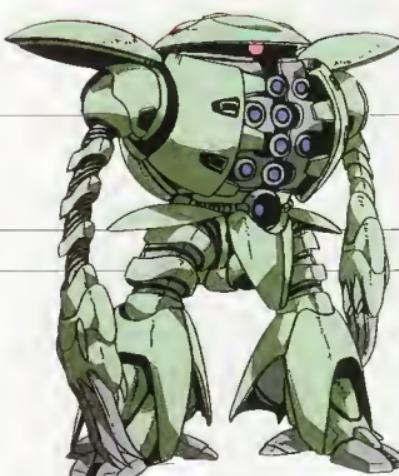
▲MS形態

OZ-08MMS キャンサー

OZの新型水中用MS。バイシーズと共に物語の冒頭から登場。主なパイロットは、トルギスに真っ二つに裂かれたのが印象深い、アレックス。



▲水中巡航モード



AMX-109 カブル

ロスト・ウルテンから発掘されたミリタリのMS。主なパイロットはソシエ・ハイム、コレン・ナンダーなど。コレン専用機は赤く塗装され、最終回では角筋りが付いた(右写真)。

△ヤガンダム



『ガンダム』放映から20周年にあたる年に、富野由悠季監督の手による新たなガンダム。ガンダムというタイトルでありながら、物語の内容はどこか牧歌的な異色作。月からディアナカセンターへの襲撃により、突如目覚めたヤガンダムと、それに偶然乗り込んでしまった少年、コレンの愛と葛藤、そして奮闘の日々を描いた物語である。

DATA ●放送年: 99年4月~00年3月 ●キー局: フジテレビ ●話数: 全49話



△中央がコレン・ナンダー専用機



「G」、「W」に続くガンダムで、やはり宇宙世纪ではない。本作を含めて「平成ガンダム三部作」と呼ばれることがある。「ガンダム」と同じく戦争を題材にした物語ではあるが、舞台は戦後の時代に設定されている。A.W.(アフターワー), 宇宙独立戦争が終結してから15年。戦争の轟轟に苦しむ人々や、たくましく生きる子供たちの姿を描く物語である。

DATA ●放送年 96年4月～96年12月 ●キー局・テレビ朝日 ●話数 全39話



DTM-7200
ドーシートⅢ

ドーシートの発展型。脚部ユニットがウォータージェットエンジンに換装され機動性が向上した。反面、陸上での機動力が低下し、実質的には水中戦用機。



DTM-7000
ドーシート

旧連邦軍が開発した水陸両用モビルスーツ。水中では油圧スクリューにて航行する。戦後はシーバルチャービなどによって運用されることが多かった。



GT-9600+S-1
ガンダムレオバルト
水中オプションS-1

旧連邦軍の重火器装備型ガンダム。水中戦用の武装をほどこしたたないガンダムレオバルトに、小型潜水艇や多連装魚雷ランチャーをオプションとして装備した姿。



ハンドメイドMA
エスペランサ

制式採用された機体ではなくハンドメイドのMA。女MS乗りのエニル・エルが搭乗したが、[X]の敵役、フロスト兄弟との戦闘で撃破された。



DTM-6600
ドータップ水中型

元は旧連邦軍の使用する主力MS、ドーシートの支援を目的としたモビルポッドで、それを深海作業用へ改修した機体。第16話「私も人間（ひと）だから」に登場。